川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年二月二十五日　印刷
昭和四十一年三月一日発行（毎月一日発行）
（第六巻）

No. 6

三月号

黒潮おどる 紀州路の旅

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

[illegible] 第2[illegible] [illegible] 12時38分発

[illegible] 臨時1[illegible] [illegible] 13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

[illegible] 南紀1号 [illegible] 7時45分発

[illegible] 南[illegible]2号 [illegible] 16時40分発

[illegible] 直[illegible] [illegible] 22時57分発

● [illegible]

[illegible]

[illegible]

南海電車

中外製薬

疲労回復へ 集中効果！

新発売

●活性持続型ビタミンB1とグロンサンの新配合です ●複雑な神経の疲れの回復と●細胞に溜る疲労毒の解毒と●このこつが同時に疲れの深層へ働き●独特な集中効果で現代疲労の回復を早めます●新しい年の●新しい元気のもと 新グロンサン錠 を●中外会の店のしるしの出ている薬局・薬店でお求めください

活性持続型ビタミンB1(＋)グロンサン

新グロンサン錠

包装 100錠・250錠・500錠

今月のことば

中島生々庵

◎つい先き頃「生活の知恵」というテレビの時間に、「現代っ子に夢があるのか、ないのか」が出ていた。

◎この問題は余程以前からとり上げられている問題である。現代っ子に将来のことについて尋ねてみると、月給とりになりたい、通勤の楽な、空気の静かな、一寸した庭もある住宅に住みたい、自家用車を持ちたい等々いわゆる小市民的な悲願でしかない。

◎片田舎の小学校に通っていた明治生れの私達の頭の中には、東郷大将、伊藤博文、二宮金次郎といったのを最高の人間像として描き、それに近づくために勤倹力行、寸進尺取の努力というものが、夢を築く材料にされていた。なぜ働かねばならぬか、働く目的はなにか等の理解は暫く問答無用。働くことは美徳であり、最高であるの一筋道であった。

◎心理学者は曰く、「現代っ子が小市民的な悲願でしかないからといって、それが直ちに「夢がない」ということの証拠にはならない。昔の子が、「大臣大将」を夢みたのは、それだけ社会的に無知であったからである。高い想像力とは頭の中に、多くの材料を持ち合わせそれを総動員して創造的想像を生み出すことである。頭の中がカラッポで、ほとんど材料がないのにその僅かな材料で現実離れした夢想を作り出すことではないのである」と。

◎昔の子どもと現代っ子が考えたり見たり想像したりする夢を、私は私達が生活句を作る上に何か教えられるような気持がするのである。

川柳塔三月号

川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……中島生々庵……(1)

★よくぞ女に生まれける……(26)
―同人特集―
内藤きさ子・高橋操子・光好陽子・藤村〆女・宮尾あいき
小笠原青女・天正千梢・小林トメ子・野々口美舟・岩田美代

川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)

猫なみの目的……麻生葭乃……(17)

ブライス先生の憶い出……阿部佐保蘭……(38)

秀句鑑賞……(前月号から)……後藤梅志……(18)

川傍柳初篇研究……(三十三)……(24)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・高須啞三味・丸十府・岡田甫・

「川傍柳」の紹介……(上)……清博美……(21)

王昭君の墓……（大陸放浪）……東野大八……(40)
いのちある句……（中級川柳講座）……戸田古方……(42)
明治川柳と風俗……（十）……奥津啓一朗……(44)
雅号ぶつちやけばなし……野村味平……(43)
……天正千梢……(61)
川柳塔社第一回常任理事会……(51)
近作柳樽……西尾栞選……(32)
大萬川柳「苦笑」入選発表……清水白柳選……(52)
金泥集……麻生葭乃選……(45)
作句教室……清水白柳……(48)
★柳界展望……（薫風）……(54)
★本社二月句会……（庸佑）……(56)
★各地柳檀……（文秋）……(59)
一路集
「早出」……山内静水選
「借り着」……高橋操子選……(46)
「達筆」……浜田久米雄選……(47)
★編集後記……白柳・一三夫……(64)

川柳塔

中島生々庵選

大阪市　不二田一三夫

末娘薄子結婚（五句）

二女出産三女結婚おらが春
娘三人みな惚れられて嫁（い）ったまい
わが姓は一代かぎりそれもよし
養子などまっぴら　老い先き考えず
宝ものつぎつぎみんな奪われる
その咳呵飲まずに切ればいい男
京ことばにも恐喝罪ありはあり

倉敷市　木村千容

八十の春を迎えて

八十の坂けわしくてけわしくて
漫画ともならん女房は尻を押し
八十の春を寿ぐ実南天

用心に持つた杖いま力杖
サヨナラはさきにいうほが得と妻

岡山県　浜田久米雄

物価への抵抗すこし麦をまぜ
ブロックの仕切りで庭が拡げられ
東京へ出る娘の荷物小さすぎ
目を見張る家計簿がまた買い足され
物価高せめて野菜の種をまき

大阪市　後藤梅志

新聞屋朝の動きはただならず
今買つて来た七草へ妻が呼び
背が低くなれば間に合う片身分け
どうにもならぬものがめいめいある不思議
門司のふぐほれぼれと見る床柱

大阪市　橘高薫風

一人去り一人去る聖堂に来て夫婦
子の頭蜆のごとし可愛ゆし黒し
虹追うて行くには小さい舟がよし
われに過ぎたり絢爛と死ねる歳
白椿ある夜は紅椿を憎み

高槻市　若柳潮花

舞初め雑感
鬢つけの匂いでくぐる注連飾り
四海波静かに仙台平の音
民謡の輪になり仲居呼び込まれ

村山光輪氏母堂を弔む
弥陀の灯へいま参ります珠数をかけ
子に嫁に孫に空しさだけ残し

京都市　松川杜的

尺八とともに三十年
雨垂も入れて雨の曲テープする
免許状の横で恩師笑み給い
愛管をぶつけた事も語り草
三十年の手垢が語る笛の色
初春の行事は笛で幕を切り

京都市　都倉求女

父死去
読経にはかくも哀調あると知り
時雨する山は父を焼く煙
雨嫌いの父の出棺時雨けり
標本を説明するよに骨を呉れ
古墓に骨と朝霜埋めけり

高槻市　傍島静馬

ぬくいからみこしを上げた初詣で
受験する孫励ましてお年玉
嫂(よめ)は玄関母はお勝手から出て平和
財布の中見せるポーズでする払い
交替で末の娘訪ねる老夫婦

岡山市　服部十九平

土地ッ子の意地で外様が落選す
虚無僧は姿勢がいいので写される
汚職拡大俺も歳暮を貰ってる
床柱代理が窮屈そうな膝

児島市　本田恵二朗

言訳けは聞きませんよと聞いている
額の裏その手は古い見つけられ
ぼんやりで困りますのという自慢
モナリザも遠く及ばず額の母

豊中市　戸田古方

しあわせは鞍上の人信じきり
振袖だけが歩いておりました
大三十日　夫のむごい忘れもの
「道はるか」賢女は白髪気にしない

大阪市　山川阿茶

恙なくむかえためでたい古稀の春
猿ひきの綱を連想するエレキ
身延の荒行
零下四度水かぶるのを炬燵で見
クリスマスツリーのような松を活け

青森県　木村涼人

みちのくの寒に無気味な青い空
坊さんの不景気話恐れ入り
弁解も書いて賀状が五日附
妻の皺どれかは俺の為の皺

豊中市　林夢虹

悲しみを食べて女ふとる
人間の怒りは蝶を刺しただけ
人間に右手左手武器がいる
言葉持つ人間の持つ偽りよ

大阪市　金井文秋

折伏のように根よくコマーシャル
財布ぶつちやけて負けさす銭を読み
念押せばわかつてるよと反抗期
破算して男はつらいものと知る

岡山県　田村藤波

今年こそは揚げてみせたいアドバルーン
押しまくつた仕事のたたり十二月
人間の相場が物価に追い越され
お雑煮に入歯をとられまい覚悟

出雲市　尼緑之助

一発を狙つた初荷雨に濡れ
ハツタリのサービス正月の飲み疲れ
日曜の炬燵お客をまごつかせ
追つかけて来て大根を二三本

ハワイ　築山快夢起

ねむそうに見えるコケシの売れ残り
ベトナムの方へ蔭膳据える母
その瞬間無死満塁へ投げる球
割勘を払わしといてそれつきり

大阪市　今西章雅

お隣はん閉店(しめ)はりましたと事もなげ

例えばの話とからんで来る気らし
釣合わぬと云うのにたつてと所望され
ＯＢ会なく定退のそれつきり

布施市　久米奈良子

たあいない心晴れたりくもつたり
健やかにいませと母へ屠蘇を注ぎ
白珠を濁りにそめず抱きつづけ
枯れすすきみ堂の裏も新春の風

岡山県　大森娯句楽

人生の今年こそはの今日も暮れ
除夜の鐘やれやれ嘘で年が越せ
ゼエスチヤーのはがゆい所で鐘が鳴り
ジユミニ号無銭旅行をして戻り

青森市　工藤甲吉

残高はゼロのままなる貯金帳
一人来た宿で二人にいちやつかれ
胎動が弱い女を強くする
しみじみと祖先を思う鍬の形

大阪市　水谷竹荘

酔うててもお女将計算間違わず
役得になれて汚職と気がつかず
お湯加減どうでおますと仲居来る
豊満な乳房へ診察まぶしそう

松江市　小林孤呂二

筆不精だが年賀状だけは呉れ

出雲大社初詣

一家無事祈る足もとに鳩が寄り
御神くじは吉もう一度読みなおし
お詣りのあと出雲名物そばを喰い

愛知県　原峻一郎

盲いの子を持つ友（二句）

盲い子へ玩具えらぶも眼をつむり
屠場の牛泣けば盲い子抱きすくめ
酎一杯ふやして日雇いのクリスマス
初日待つ間におむつ洗う妻

諫早市　川岡靈眼子

木曽川ラインより犬山城を臨む

お城にも電灯がともる御代の春

前日さくら切符入手して帰る
値段より買えた感謝で乗る夜行
精神労働などとベツドに横たわり
師の事をしのび盃加減する

大阪市　天正千梢

広告を出して晩婚安売りし

ペンだこを出して物理にむかう孫
ゴルフ スキーと家では雨がもっている
二男成人定退の父元気づけ

大阪市　福井多蘭子

誤配の年賀届けてついでのご挨拶
神様を今年へ誘う棚飾り
妻の好きなものも買い溜め大晦日

大阪市　正本水客

幸せな風カーテンにひだ作る
独身にも倦怠期があるという
ひげ剃ってさて行くとこがなし

防府市　長野井蛙

年の暮方便の嘘も種が切れ
お歳暮を拒めば変りものにされ

病を得て

手術台笑つた仏の名も唱え

今治市　長野文庫

雨も織りこんで計画二本立
他人事だから運命だなどと云え
決心がつきすっとする肩のこり

倉敷市　田垣方大

なくなつてから餅ないか餅ないか
セーターを脱いだり着たり春寒し
春の草 金の話などするな

下関市　桜川不水

手掬いの豆腐労わるようにくれ
子雀も可愛くませた砂を浴び
息吹する土に芍薬芽の構え

岸和田市　内藤きさ子

大晦日霰たばしるいいムード
紙屑がコロコロ私を追うてくる
風と風ここで出合うている落葉

大阪市　中島小石

けし粒にも似た人生を泣き笑い
味方にも甲乙つけて気を配り
いつわらぬ鏡へ疲れはてた顔

西宮市　樋口舟遊

愚を悟るタワシはちびてちびている
食パンの起伏にさえも生活の詩
冬の石男のこぶし凍てている

大阪市　大坂形水

孫の顔見に東京行きの用つくる
良い方の靴履いて出る御招待
北浜にくすぼつたまま男老け

門真市　福島鉄児

何の苦もないのか女よく笑い
十二月睡眠薬に頼る日々
ボーナスを頂いてから腹が立ち

京都市　大鶴喜由

自動車に押され軒下歩かされ
松過ぎてさてもわびしいわが心
桃割に節分の豆はねかえり

高槻市　福田丁路

カタログのように咲いてはくれぬ花
冗談が過ぎて風雲急を告げ
一切を忘れ御気嫌麗るわしく酔い

大阪府　西いわを

若夫婦照れているのはこちらです
裸木の梢が網の目を拡げ
尻尾上にして凧電線へ引つかかり

大阪市　木村水洞

本年も神を信じる初詣
　長男のアルバイト
教室にない学問を膚で知り
食膳へ働いて来た顔で座し

岸和田市　植山武助

造花ではうれしい雰囲気にはなれず
寛大な養生訓の医者に決め
気にしたらあかんと厄除箸をくれ

竹原市　杉原愛鳩

曼珠沙華護岸工事へもう咲かず
柱時計のネジ巻いておく大みそか
弁当があとから届く松の内

島根県　藤井明朗

里帰えり土産途中で迎えられ
音立てぬつもりの猫を知る嵐・
デートから晴着不機嫌そう戻り

大阪市　本多柳志

元日の日誌に嘘はなかりけり
数の子は見るものにして屠蘇に酔い
好きになりそうな心が恐くなり

大阪府　早川清生

舌幾度抜かれてもまた生えてくる
身をなだめすかして定年後を勤め
スラムの子慈善の菓子の味に馴れ

大阪市　西出一栄

年始客妻に任して釣に出る

出しやばりへ話のスイッチ切替える
内孫にやりこめられたを自慢にし

呉市　林野甦光

泣きどころ知つて仲裁買つて出る
ドンブリへ刺身五切の箸枕
立読みへどうにもならぬ足の冷え

ハワイ　羽佐間柳葉

長話とうとう借せと言い出せず
同棲は越えて男を敷きたがり
良縁の定義親子に距離があり

倉敷市　野田素身郎

定年がくるのをうつかり忘れてた
表通りに出て組んでいた腕をとき
会社倒産ゴルフの腕だけが上り

愛媛県　村上旭童

十二月まわれ右して見たくなり
ねざめては又一ぷくの外はなく
出稼にいつそ我家がなけりやよい

岡山県　横山一声

立札の裏からゴミを捨てて行き
金少しためて妻も若がえり
お賽銭を見積つて見る初詣り

大阪府　高津徹也

冬座敷主賓としての身づくろい
冬蝶を視界をはなるまで追いて
命から命生まれる冬ぶすま

大阪市　福井野迷路

クリスマスに思う

愛それは敵を愛することだつた
旅の切符とれず損したように思い
その内に何とかなると云う人生

奈良県　西辻竹青

無理せずにながいきせよと言うたけど
奥様が朝寝している間に稼ぎ
湯の香よりうちの炬燵と妻は言う

笠岡市　木山遠二

耳元で怒鳴られ聾びつくりし
老いし身のもう藪医でも事が足り
神様の御名は知らず初詣

竹原市　山内静水

名門のお邸晩婚ひそと住み
嫁がせたくない成年の日の娘
芸なしのおんなステレオかけたがり

高砂市　吉原紅月

お元日猫に餌をやるのを忘れ
お年玉くれるお客を子等見分け
晴着脱いでからぜんざいを食べなおし

神戸市　仲　どんたく

新築へ大の字に寝る部屋が無し
どうせパパの娘やものと鼻で云い
重役に子供の出来をうらやまれ

堺市　高崎雄声

株騰る傷手のことはもう忘れ
不粋な野郎に欠伸うつされる
その他大勢居なけりや会議成り立たず

兵庫県　遠山可住

内職の妻の手首にある輪ゴム
酒に強うなつて公僕あわれなり
あてにせぬ時計は好きなときに鳴り

小松市　関戸宗太郎

招き猫両手で招く特売日
人並みに起きて遠慮のない欠伸
夜逃げするにも乗りなれた一等車

高槻市　山田季賛

仕事始め話ははずむ飲む話
年始め月賦のプラン妻と立て
チツプまで割勘にして酔いつぶれ

大阪市　児島与呂志

ワンマンの市電に乗つて落ち付けず
満八つ年玉貰らえる予算立て
旅だより小さい駅の善意書く

大阪市　河井庸佑

転校の地方なまりが取り巻かれ
一が二になつて得意の通知票
忠告をすると言いたいことを言い

新居浜市　安藤桂仙

墓場より招かるまでの弁当提げ
宿命は三ちやんの田へしがみつき
嘘言つた顔をまじまじ見つめられ

出雲市　中川晃男

初詣で帰りに事故を頂戴し
日本髪のかつらを撫でる注連飾り
順々に食べて出かける朝の門

笠岡市　松本忠三

初詣孫に石段数えさせ
見送りの波で餞別出しそびれ
ストーブで餅を焼いてるヘルメット

新居浜市　小林孝正

暗転もあつて人生楽しけれ
庭先きの草引いただけ今日も暮れ
踏切りへ今日も無事故の水を撒き

大阪市　米虫一乃字

冗談でない気まずさの猪口を伏せ
札のしわ伸ばすくせあり貧乏性
書初めに欲と言う字を書いて見た

鳥取県　清水一保

大丈夫飲んで話せる人と知り
産むなとは少々無理な丙午
初詣今年は妻と呼べる仲

倉吉市　奥谷弘朗

緩めたら浮気するよに妻想い
見解の相違ぐらいでにげて来る
娘の晴着夫も手を貸す蝶結び

岡山県　池田古心

ハンドルは自信横からの体当り
釣竿が病院抜ける快復期
貧乏をしたら気楽と云う台詞

岡山県　藤原秋月

電文の誤字へみんなの知恵が寄り
郵便の値上げせぬ間に脅迫状
刑務所があるから入る人もあり

大阪市　川口弘生

お互に風邪引く年に夫婦成り
痩せた医者に胆嚢炎を予言され
おばあちやんの留守を内孫さびしがり

小松市　馬場魚山

ボーナスへ一人離れて臨時工
魚市へジヤンパーのせりも出る不況
新設道地主大きく物を言い

布施市　渋谷三時

お辞儀する程の熱意で握手する
開店まで何屋かわからぬ隣り組
年賀状どうのこうのと待つ癖に

伊丹市　小川静観堂

百八の鐘へ保険のペンを措く
初伊勢もやつぱりせわしい旅でした
息を呑んだところでテレビ「終」るなり

芦屋市　唐崎専翁

混鈍の世とも思えぬ青い空
唯物は庶民の生産意欲源
腹立てば山に向いて呼吸する

下関市　原　千里

灰事ぐらいしたらどうかと噛みつかれ
家中が留守して犬もふて寝する
天気予報回れ右する山の家

大阪市　賀本　昇

計算に強い女房でヘソくれず
病妻へ屠蘇のまねごと酌いでやり
ギリギリの線まで寝てる勤め人

福岡県　太田湖平

笹藪を出て小雀の餌拾い
兎も角も添う糸切れず五十年
子三人産むに度胸のいる暮し

芦屋市　松下たつみ

残り酒みんな集めて呑みたらず
舞鶴で別かれ賀状の友でいる
地酒にも慣れて左遷のまま辞める

枚方市　宮川珠笑

帰省ではない臨終へ発つ切符
ボーナスの予定通りの味気なさ
昇格のポスト名刺がまだできず

大阪市　中川滋雀

ウインドにニヨキツと履かせたシームレス
又一人線に消された住所録
福笹が雨にキラキラ泣き戎

大阪市　室谷鉄舟

共稼ぎ生れりや止める余裕出来
お正月遠慮勝なる楪立ち
着ぶくれの分だけ地下鉄押し込まれ

岡山県　直原七面山

なんとなく愛してなんとなく孕み
意地すてて水の流れにそうて生き

熊本県　有働芳仙

常連へ耳打ちをするサービス
婦人会こき下ろしたりのろけたり

岡山県　浜野奇童

四帖半の知恵で文化の国という
惜しい人だつたと弔辞泣きにくる

加賀市　那谷光郎

まだ電化足りぬ不満のマキを割り
月並に賀状は祈り祈られる

岡山市　江国幽谷

日本的歩みに変えてお茶の席
精密検査終つてますます青くなり

今治市　越智一水

枯れ草のそこに青い芽嬉れしい芽
手拭の先で洟かむ頬かむり

芦屋市　丸川初甫

気まぐれに来たとも知らずイエス様
五十肩を笑い笑い注射され

京都市　室井八九寸

初み空富士とつときの顔で浮き
こうがいに角屋の餅は丸められ

米子市　石坂新雪

デートするコースを聞いて笑うだけ
帰郷メモ
柳都にも顔を出したい旅仕度

鳥取県　田中蛙眠子

しあわせに薄く万葉文学巧み
善男の心札所へ杖をひく

大阪府　谷沢好祐

テレビ見ていたら済んでた三カ日
値が上る上ると除夜の鐘は鳴り

大阪市　宮尾あいき

四十一年をよい年と読むとそきげん
唄を忘れたカナリヤと云うには老けすぎて

京都府　西村句楽坊

御仏がのぞく心を香でいぶし
空蟬のような愚僧の覚り貌

美禰市　安平次弘道

妻肥えて世間は俺に同情す
役人亡国小企業はあえぎ

奈良市　宮口笛生

初日の出へねまきの侭の新呼吸
化粧代かかっています美しさ

平田市　久家代仕男

釣竿を携げて晦日を気ままな子
懐かしい歌へ勝手の母も和し

児島市　伊丹阿喜良

鍵っ子を淋しがらせて陽が沈み
馬車馬のようにつかえた社がつぶれ

今治市　小笠原青女

弟に女子出生
元旦の産声迷信ふっとばし
よくもまあ勝手な願い鈴ならし

兵庫県　河原みのる

出初式ルージュの一隊あつてよし
コウノトリの死

人間よりなんぼう大事な鳥が死に

大阪市　宮地双楽

夢もたぬ余生は蟬の抜けたから
達筆が個性を生かす味忘れ

松江市　柳楽鶴丸

一度でも叩いて見たい妻の顔
いやですとはつきりいえる娘に育ち

大阪市　羽原静歩

もう一寸いけるお方が酔いつぶれ
この人の癖名刺を出したがり

兵庫県　大江秋月

貧乏な家だがねずみ来てくれる
時計だけ派手に音して妻も留守

富田林市　岩田美代

初詣で愚痴もちよつぴりもらしとき
友の愚痴聞いて何やら安堵する

鳥取県　渡辺乱坊

初詣妻に願いをせがまれる
結婚にケチつけた友と立話

善通寺市　岡田彰男

スモツグに馴れてまぼゆい空の青
出る釘へ僕の若さがけしかける

新居浜市　近藤凡生

立直るチヤンス涙も添えて貸し
それとなく子等に米の値も聞かせ

大阪市　田中多幸

忘年会下戸の隣に席を取り
手土産のいる程敷居高くなり

八尾市　宇佐見彰大

おき忘れしなくなつた高い傘
お茶席で一つ覚えの三口半

三次市　和泉松風

初詣で氏神様もえびす顔
老人の元気につられ一万歩

—自選—

三女九州へ嫁く

清水白柳

空港で望遠鏡の要るわかれ
見送りが声にならない朝の冷え
往くだけでよいと母親ねだる旅費

川村好郎

湯けむりの中に元旦かみしみる
温泉の妻の正月寝るばかり

去るものは追わずと男妬いており
ふたりだけ他人の顔でいるつもり
云い負けてそれでよかつた帰り道

北川春巣

年賀状にも石の趣味吹聴し
七日過ぎ賀状の返事恩師から
成人式待たず市議から祝い状
福笠の売れ行き見てる悵手
八頭身の巫女のご祈禱有難し

山形出張

西尾栞

二人降り一人乗りたり雪の駅
雪景色と別にダイヤの大乱れ
お寒むと入る炬燵は左側
雪焼の頬の女中は二十才とか
駅弁をおいしく食べる雪の窓

若本多久志

儲うかつた昔話を二へん聞き
掃除器もあり箒も要るくらし
救いなき人生倖を知らぬ性
余生とは娘も嫁かせて二人きり
どの顔もドギツク個性なき化粧

菊沢小松園

実家へ帰り考えますと走り書き
ありあまる餌へ神馬の痩せ細り
うろたえて止めた客だけ損をせず
美しい砂から先に手をこぼれ
妥協妥協へ反対党も手を叩き

中島生々庵

割り切つて除夜の鐘きく退屈さ
ふと気付けば錦魚が生きたお正月
三カ日でも日歩二銭五厘容赦せず
芽出たしとも芽出たくなしとも膝頭
ラッシュたのし年賀を吊皮にゆれたまま

松江梅里

大万創業二十年

ひつぱられ押し上げられて二十年
松明けてもうかうかとしておれず
原則としては駄目だが考えよう
言うことを聞けとは男の言う台詞
お目あてが休みゲンだけつけて去に

猫なみの目的

麻生葭乃

「此世の中は仮の宿だ」みんなそう云うている。朝眼が覚めたら、男は男で、女は女でそれぞれ持前の仕事でうろつき廻り、夕食がすんだら寝床へもぐり込む。こんな暮しが走馬灯のように繰り返されて一年が来る。よくも飽きないものだと、私自身もそう考えながら、一年過ぎ、二年過ぎ、今日の高齢に達するまで、寝たり起きたり、食べたりの連続であった。猫も矢っ張りそうだった。

然し、猫と人間と一緒にするのは殺生だ。少なくとも、人間の行動には目的があると云う人もあろうが、猫だって猫並みに目的を持っている。飼主に可愛がられて、高い屋根へもあがって見よう、此かいわいでのボスにもなってやろうと思っている。それは高尚であろうと、なかろうと目的には相違ないのだ。

それでは、猫も人間も目的を貫徹さすために生きているのだろうか、いや、そうではない。猫は目的を果せなくても、唯なんとなしに生きていたいのだ。人間の方は理由なしに生きる事に羞恥を感じている。政界のためだとか、芸界のためだとか自分の存在価値を高めようとしている。何となしに生きていたい猫の方がよっぽど正直である。

街を走る車や、明滅するネオンの灯も永遠に自分から消えてゆく死の到来を人間は恐れている。よしんば、再生を信じるとしても、生れかわった自分が、スモッグの街を歩いていた頃の自分を覚えているだろうか、此恐怖がすべての生物を地上に縛ぎとめているのである。思いあがった人間や、何となしに生きていたい動物の新陳代謝が日に日に行われて地上は繁栄してゆくのである。私どもは地球の冷却する日まで、理窟抜きで、自然の力に従うてゆくのが真の幸福であると思う。

猫のわがままに共鳴をする
雅量出来
背の青い魚は食わぬ猫を抱く

雑詠

大阪市　橋本緑雨

金儲け他人の話にのらぬなり
先は知れてると炬燵から手をのばし
みかん一つに夜はながながし十二月
元日だけがひろびろした家のよう

長野県　高峰柳児

釣銭ちゃんととりウインクへ眼もくれず
出迎いへ栄転酔がさめていず
帰休制邪魔にされてる寝正月

和歌山市　秋月宏方

金も一応やりくりついて大晦日
宝くじつまり百円出した夢
人生劇場出口に近い年となり
宿の下駄レディの足に触れる幸
平和とは炬燵の中で何かたべ

名古屋市　長谷川鮮山

友情のそっとそのまましとく酒
人からはどけちと云われすましてる

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

福寿草父子兄弟に似たりけり

（薫風）

福寿草の句には、葭乃先生の句に「福寿草松に従ひそろかしく」という佳品があるが、これはたぶんに思想的なにおいを放っている。

「父子兄弟に似たりけり」と云いきった、この句は、純粋な写生句と思われるが、作者の清潔な感情がのぞいて、単純な写生句ともおもわれぬ。佳品といってよかろう。

福寿草は、育ちにくい正月の鉢植だが、長火鉢でもあって、猫板の上へ乗せておくと、鉄瓶の松風の音と調和して、茶の間には缺かせないものであったが、そうした趣味はもう無くなったであろう。五、六本の福寿草が、親子の如く、兄弟の如く、より添うて春を俟つたたずまいは、ほのぼのとした、人間父子のすがたである。

この句も一つの芳香を放っているようだ。

コレクションに罪あり料理屋の箸枕

（多久志）

料理屋の箸枕の中には、ひょうたん型のものや、なすび型のもの、色とりどり凝ったものがあって、宴たけなわになると箸枕なぞは使う人は尠いが、客膳には付き物である。

酔うてくると、むらむらとこれが欲しくなる。一寸かえりにシッケイしてくる人もあるらしいが、誰れかにも経験があろう。料理屋では、後片付けをすると大抵、盃や箸枕が、若干不足している。大事なお客さんだから、知らぬ顔をしているが、時には床の置物や、掛軸なぞも紛失するそうだ。酔っ払いは何をするか分からないものだが、これもお客様平素のコレクション趣味のなせるわざとは、気がつかなんだ。すました顔をしているが、人間とは、奇妙な動物である。しかしこれで結構料理屋が繁昌して行くのだから奇妙な世の中だ。

この句は、コレクション趣味を箸枕にしぼったところに妙味がある。おもしろい句だ。

劫の深さか失神から蘇がえり

（小石）

この句は、示唆（じさ）に富んだ作品だ。「劫」とは、業（ごう）がふかいことで、どちらも似たもの。失神とは、意識が無くなることである。

どこかで頭を打つか、脳貧血でも起したりすると、自失状態になり。それが四、五分間でも、四五時間、乃至は、二三日経ったかと錯覚する。気が付けば、万象もとの如くだが精神状態は深刻である。元来、「失神」という如く、失心すれば、神がひと時、人体から離れ去ったことになるから、重大だ。運がなければそのままあの世へ行ってしまうのだ。

この句を味わえば。行き過ぎるまで、仕事をやってはいけない。人を酷使してはならない。と深く、反省している作者が分かる。だがしかし、世の中というものは。立場立場で心にもなくむごいことやってのけることが、当然のように仕組まれていて、各人とも限りなく、劫を背負っているということを、自覚すべきである。

つまり、これが「さとり」というもので、

かくして人間はおのずからまるくならざるをえないのだ。

幼子の目へカキ餅がよくふくれ　（久米雄）

「お祖いちやんカキモチ焼いてよ」
「ウンもう三時かヨシヨシ炭をついでナ」
「眼鏡とれよ」
「ソオカお祖いちやんも中入りにしよう」

こんな風景で、カキ餅を焼く。都会では石油ストーブの上で、正月餅を焼く始末で、カキモチを落ちついて焼くなぞは、思いもよらぬことになりにけりだ。都会もむかしは、備長炭を火鉢へいけておいて、万事好都合だったが、いまは良質の木炭が手に入らない。馬鹿馬鹿しい物価高にも困ったものだが。さてこの句はいい句だ。

修辞がよく整っているのは、どうかするといや味を感ずるものだが、この句の「幼子の目へ」は如何にも、叙景に円やかな味を与えた。

トボトボと歩けば鐘が鳴りそうな　（旅　風）

作者に訊かねば、そこが何処か按ずべくもないが、余韻嫋嫋としている。そして、この句には風格がある。芭蕉の句に、

「草臥れて宿かるころや藤の花」

という句があるのを思い出したが。芭蕉が奈良から大阪へ向う、途中、これは大和丹波市での句である。亡師、路郎の

「だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと」

この句は、山中温泉へ行かれたときの句で故人はみな場所を明記しているが、今はこういう詠み放しの句に、いい句がある。

この頃の世の中では、いい句（本当の）というのは尠いが、この句なぞは辛抱しなければなるまい。旅風君近来の秀吟と思う。

この句は、陰影がないのと、飄逸なのが取り柄である。

そう酌ぐな酌ぐなと余生の酒うまし　（光　郎）

悠々としたさまが見えて、これにも作者の風格がある。

路郎先生は、献盃をしないので有名だったが。自分の酒を呑む者にとっては、献盃はむしろめいわくであろう。いかな美妓のサービスでも、老体に、置き酌ぎなぞは、もっての外である。

床の間衆の、貫録がみえる句だ。

釣り上げた方へじわじわ竿が寄り　（代仕男）

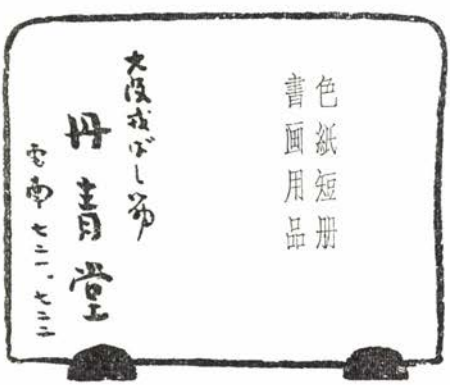
動作が、目に見えるようで愉快だ。

傍らの人が一匹釣ると、そこへばかり魚が寄るような気がして、気が気でないものらしい。釣り人心理とでもいうものか。静かな釣りを楽しんでいる人にも、競争意識があるのがおもしろい。「じわじわ」が非常によく利いている。

餅のない正月もした子がはたち　（梅　里）

人世は有為転変である。昔サンザン苦労した人も、刻苦精励、漸く成功者といわれるようになったが、過去のことを振り返えれば感慨も無量なるものがあろう。

この句は、働け、くよくよするなと教えている。餅のない正月を迎えた頃の、子供は、五つか、六つか、数えればもう十四五年にもなるか。成人した子供を見れば、よくぞ頑張ったものだと、しみじみとした心境にならざるをえない。いのちがある間は、働いて借金



も返さねばならぬ。と覚悟を極めている様子が見えて、何かしみじみとした、佳句である。遠い過去を、川柳に詠みこむ手腕凡ならず。「正月も」の「も」の使い方に、作句上の苦心が見える。

婚約のときは甘党だった人

（たつみ）

婚約当時は、甘党ということで、おしる粉屋へも附き合ってくれたが、結婚したいまでは時々酒の匂いもさせて、あながち甘党ではなかったという奥さんのなげき。ありそうなことである。猫をかぶっていた男性が、憎くくもあれば、可愛いくもある。どこでも聴く話だが、スラスラとして、ユーモアを感じさせる句だ。

大学出とだけ　大学の名は云わず

（春　巣）

大学出は夥しい数だ。それもその筈、むかしの高、専がみな大学に昇格した現在。大学の教養はみなつけている。

訊かれれば、云わぬことはないが、よくよく名の通った大学でない限り、出身校はふせておきたいのが、この頃の大学出だろう。

又、上役の人も、そうせんさくする必要がないほど、知的教養は、こんとんとしている。引いては、訊かないのが、エチケットの現状らしい。この句、復雑な世相を衝いて、なめらかな作者の手腕を示している。

大穴をねらう眼つきのハンチング

（初　市）

或るスケッチだが、作句経験ゆたかな作品だ。競馬や、競輪の大衆はたいてい無帽のようだが、プロはハンチングを被っているものらしい。

ハンチングといえば、刑事を連想するが、この頃のハンチングは、競輪なぞのプロに移ったものか。みな眼つきの鋭い連中だ。

心中はいやと免許を馬鹿にされ

（峰　子）

女性の句も、男性の領域に立入って詠むようになれば、作句力が進んだことになる。

この句は、免許をとりたての若い男が、女性から

「あんたと心中するのイヤダワ」

と同乗をことわられてるところらしい。この頃は、矢鱈と免許をとりたてのくせに、女性を乗せたがる。交通違反をやらかすのは、こういう連中だから、精々バカにしてやるがよろしい。活潑な女性が目に映って愉快な句だ。

小鉢もの師匠と弟子の中で呑み

（潮　花）

法善寺横町に、二鶴（じかく）という小鉢物やがあった。安直で、きれいな仲居がいて繁昌していたが、今はもうない。

あの頃はよかっとおもう。酒も、女もうまかった。郷愁に似たものをかんじながら、この句をじっと味わったが、昔を今に、かえしたような気がした。

まず師匠の白たびが目に浮かぶ。会計は師匠のおごりか。お弟子さんのおごりか。話がはずむ、芸の話だ。徳っ利が、二本、三本とふえる。仲居が来る。師匠はなかなか粋人だもてるのは師匠のほうだ。ああ酔った、酔ったと、パチリと扇子をひらく。どうも師匠は長っ尻のようだ。

小鉢物ばかりの店というのは、いまはもう無いであろう。むかしは仲居さんが、大きな「広ぶた」へ小鉢物の数々を入れて、客席へ廻って来たものだったが、春団治も、二鶴へはよく来たことは、あとから分かった。

この句。小鉢ものと、師匠と弟子の融け合いが、よく利いて申分がない。

「川傍柳」の紹介（上）

初篇輪講の掲載に寄せて

清（せい）博（ひろ）美（み）

一、「川傍柳」の誕生

今からおよそ二百年あまりさかのぼる宝暦七年（一七五七）に、江戸浅草新堀端門前町の名主、柄井八右衛門（当時四十歳）は、その俳名を無名庵川柳と号して前句付の点者となり、万句合の興行を始めた。

万句合の興行とは、点者が出した七七の前句題に対し、五七五の付句を応募する一種の懸賞募集である。もっとも現代のいわゆる懸賞募集とは少し違って、応募者は一句につき十二文（のちに十六文）の応募料（入花料ともいう）を支払わなければならなかった。この入花料で、賞品や摺物などの諸経費がまかなわれ、残りの分が点者の収入になったのである。

当時の江戸では、この前句付の文芸が非常にさかんであり、有名な点者だけでも二十余名を数える盛況で、それぞれ万句合の興行を行なっていたのである。

さて、初代川柳の万句合興行だが、これは一年中行なわれていたのではなく、毎年八月から始められ、月三回五、十五、二十五日を開きの日とし、十二月初句に終るのを原則としていた。したがって、正月から七月に至る間は、万句合興行も休会で、応募者とりわけ定連といわれる人達は、手持ち無沙汰を感じたのである。

そこで、この正月から七月に至る休会の時期を利用して、江戸の所々に散在するグループの間で句会が催されるようになった。初代川柳も、こうしたシーズン外の句合に出席して、精力的にその指導にあたったのである。その摺物を春期版万句合という。

春期版万句合の興行には、いくつかの異った形態がみられるが、その一つとして、特定の個人（主に「柳多留」を刊行した花屋久次郎）が主催者となり、多数の組連（組連とは応募句の取次所。応募句は直接点者に投句されるのではなく、この組連を径由して点者に渡された）に呼びかけて、角力句合や奉納句合などを催したのである。この角力句合や奉納句合などにおける入選句は、九篇以後の「柳多留」の巻頭、巻末を飾っている。

また一方、こうした個人が主催者になる句合とは別に、有力な組連が単独で行なう句合もあった。これらの句合は「春楽三評」および「五五の会」といわれている。

明和二年（一七六五）に、当時の有力な組連であった錦連は、川柳・机鳥・露丸の三人を評者に迎えて「春楽三評」の句合を催し、更に二年後の明和四年にも、川柳・錦江・露丸による「春楽三評」を行なっている。また、初瀬連も安永六年（一七七七）に、川柳・机鳥・緑江を迎えて三評句合を催している。

「春楽三評」の句合は、その文字が示すように、いずれも三人の評者を迎えての句合で、初代川柳一人の評になるものではなかったが、初瀬連は明和六年（一七六九）の正月から七月までの間、初代川柳一人の評による組連句合を催している。

この摺物の序文には、

当秋定会迄何とやらに徒然にまかせ正月

より月々五五の会興行し板行にちりばめ誠に好道をあらはすのみか。

とあって、シーズン外の句合を催した意図を明らかにしている。

この「五五の会」は、その後も引き続いて開かれたものと思われるが、以後の資料については、安永六年の分が発見されているだけである。

「五五の会」は、一人の評者による一つの組連の句合で、先にふれた多数の組連の参加による角力句合および奉納句合、あるいは三人の評者による春楽三評とは、その性質が違っており、摺物も後に刊行された組連句集の形式に非常に近いものであった。

「五五の会」を催した初瀬連は、安永七年（一七七八）に姿を消したが、そこに名前を連ねていた連吟者達は、その後登場した蓬萊連に集まり、安永九年から始められた月並会―「五五の会」が更に発展したもの―に参加している。

この蓬萊連の月並会における入選句をまとめ、一冊にしたのがすなわち「川傍柳」（かはぞいやなぎ）初篇である。「川傍柳」初篇は非常に評判がよく、その後天明元年（一七八一）に二・三篇、天明二年に四篇、そして翌三年に五篇が出版されたのである。

さて、以上述べて来たことを簡単に図示すれば、次のようになるであろう。「川傍柳」は、初代川柳が産んだ「柳多留」および「末摘花」の弟にあたる川柳句集というわけである。

二、「川傍柳」の内容

「川傍柳」（かわぞいやなぎ）に収録されている句は、およそ三五〇〇余句、作者も一〇〇余人を数えることができる。

初篇より、朱楽菅江をはじめ眠狐・泉河・門柳・五連などの大物がその名を連ね、二篇にいたると、更に雨譚・玉簾・素鳥・雀芝などの有力者も加わり、板元として柳多留を刊行している花屋久次郎も加わるなど、単独組連の句集とはいうものの「柳多留」に匹敵する大きな句集であった。

「川傍柳」は、各篇に朱楽菅江が序文を書き、また三篇には四方赤良の序文もみられ、各篇それぞれに趣向をこらしたもので、当時大流行をした洒落本の序文を思わせるものである。柳多留にみられる呉陵軒可有のあっさりとした事務的な序文にくらべると、はるかに文学的色彩の濃い序文である。

「川傍柳」にみられる句は、「柳多留」のように、一ど万句合に選ばれたものの中から再び佳句を選んだものではないため、玉石混交をまぬがれないが、一般に理智的で、それだけに狂句的なものが多い。

また、「柳多留」にくらべて二つの点で大きな相異がみられる。

1 買色に取るとあわれでない柳　一甫
2 よほどの婚礼渡しに弐三ばい　鼠弓
3 恥しさどれか兄やら弟やら　一甫
4 高野六十扨つづいて薬研堀　泉河
5 琴でハわれる三味線ではゐる也　泉河

四月五日開

6 男の姿で人目の関をこし　葉十
7 どらの詫大工のするがしまた也　長笑
8 郭公逃カした顔で欅へ出る　魚交
9 禿衆ハおまけ銭ハもどり〳〵　魚交
10 うしにも馬にもふまれず女郎買　泉河
11 すいりやうのわるさにも土団子　鼠弓

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二―四
夜間 (762) 四四〇八

12 因果なむすめ兵法が上手也　鼠弓
13 にが〳〵敷も御咄をかっけされ　桝水
14 手習をしろとぬかすとでっちぃ　門柳
15 矢一筋来てつくしとりは逃げ　一甫
16 猫のまん中に焼てる塩まくろ　秋紅
17 大伽藍面白がつて咳をする　眠狐

右は、初篇一七丁を任意に抽出したものだが、ここにみられる特徴は、五七五でない破調句（2・4・5・6・9・10・12・13・15・16）と遊里関係の句（1・6・7・9・10・13）が目立って多いことである。この二つの特徴は、「川傍柳」全篇にみられるが、明らかに意識的に行なわれたものと思われる。

破調句は、少い丁で三・四句、多い丁になると十二・三句もある。川柳点は、他の韻文にくらべて、ひどく散文に近い文芸であるが「川傍柳」は破調句の増加によって、更に一歩散文に接近しているのである。

また、遊里趣味の洒落本風な句が多いのは菅江を中心に洒落本趣味の作者が多く集まったためだろうが、この遊里句を「川傍柳」初篇と「柳多留」十九篇（川柳評万句合安永九年分を抜粋、「川傍柳」と同じ年に刊行）をくらべると、「柳多留」では、約七〇〇句中五〇余句が遊里句だが、「川傍柳」では、八六七句中約二〇〇句におよび、その比率は五倍近くになっている。

このように、「柳多留」も「川傍柳」も同じ川柳評になる句集でありながら、両者にはその内容にかなりの差異が認められるのである。

蓬莱連は、初瀬連が姿を消した後、代わって安永七年に登場した組連で、すぐ有力団体となった。安永八年の惣句高二万五千余は、川柳評万句合興行における最高の集句数だがこれも蓬莱連の活躍によるところが大きいのである。

この有力組連蓬莱の頂上に座ったのが朱楽菅江である。菅江は、当時すでに洒落本作家として、また狂歌作家として活躍していたが、初瀬連没落以後の組連および達吟者の異動からみると、どうやら菅江自身の意志ではない他動的なもので、川柳界に関係したと思われるふしがある。

菅江の作句活動は、安永九年・天明元年の二年だけで、その後は狂歌の流行に伴って、会へ参加しなくなってしまった。菅江留守の蓬莱連は、眠狐・雨譚・五扇・泉河などによって守られたが、その寿命も短く、天明三年に解散してしまった。

菅江の句は、「川傍柳」初篇より三篇までに四九句収録されているが、次にあげるように、

能く見へる堂八方へ目を配り（傍一・10）
切手の入らぬ田楽ハまずい也（同・29）
生涯を半分しら歯にて踊り（同・31）
馥といふ字だものあてよみに鰹（傍二・9）
放馬座頭に娘ぶっつかり（同・18）

あしか四五足つれて出るぃ女郎（傍三・4）
氏なくて兄ハこわ〳〵馬にのり（同・25）

など、頭で作った句が多く、柳味に乏しい上に語戯が過ぎて、おもしろくない句が多いのである。すぐれた洒落本・狂歌作家ではあったが、川柳作家になる素質は十分なものを持っていなかったようである。

（川柳雑俳研究会会員）

〝川傍柳〟初篇研究

（三十三）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須啞三味
清　博美丸　十府
藤井和雄　岡田　甫

392　三会目まづめあかしへ壱分やり　一甫

清＝「めあかし」が、遣手婆アで。「壱分」が、三会目のチップであること、今さら説明するまでもなかろう。

慾の皮張りさけそうな婆あ（タル二四）えんまの内義（筥一）冬の月（筥二）布袋の姉（傍三）金時を産みそうなの（傍一）お取りどん（タル一四）花咲かせ婆あ（タル四〇）五十づら下げて（タル一七）仏のような婆あ（傍二）意見しそうな顔（タル一五）悪女（タル一六）はぎそうなばばあ（タル一七）小山の如くゆるぎ出て（タル二一）等々、ざっと拾った遣手婆の形容かくの如し、さてさて——。

藤井＝「目明し」とは〝与力、同心の配下で働き、多くは以前軽い罪を犯した者から採用した〟（広辞苑）ものであり、遣手は遊女の取りまわしの世話や、取り締まりをした欲の皮のつっぱった女で、概ね遊女の古手だったとある。——遣手を目明しとは、言い得て妙。

高須＝こんな句は、あまり説明すると面白味がなくなる。言い得て痛快というだけの、古川柳的古川柳。

丸＝賛。

岡田　「目明かし」は、始終目を光らせている、イヤな婆あの表現。

393　**けちながき扇を持てついてくる**　一甫

清＝不明。菖蒲売りについて行く子供のようにもとれるが……。

藤井＝何か年中行事の一つと思うが、不解、扇一つ持って行けば、何か御祝儀にありつける、のではないか。

川端＝年玉でなけりや一番いう扇子　（タル二三）

で、正月の挨拶回りに、お年玉を貰いたい子供が、親の後についてくる、という句ではないか。

高須＝正月の年始まわりについて歩く子供を「ケチなガキ」とは、随分口ぎたない感じがするが、それも古川柳的表現か？

前田＝元旦早々から年玉用の扇を売り歩く、うるさい子供を詠んだものであろう。

岡崎＝年始回りに、扇を持ってついて来るのは、お供の小僧である。扇は、年礼先へ年玉に贈るために「ばらばら扇」といって、扇とは名ばかり、実は紙と竹片でたたんで扇の形につくり、それを二本、桐箱に納めたものである。

丸＝岡島説に賛。

くたびれて供の泣き出す安礼者　（タル一四）

岡田＝岡崎説が正解。（23ウ）

394　**腹さんざ喰て山椒の方ウがゑゝ**　一甫

清＝五月節句の柏餅を詠んだ句。柏餅には普通餡を入れるが、山椒味噌を入れてつくるのもある。それで、主題句は、餡入りの柏餅を「腹さんざ食って」から、柏餅はさっぱりした「山椒味噌の方がよい」なぞと言って、今度はそれを要求している、句である。

藤井＝ありそうな事実を、そのまま表現した句で、現今でも同じと思う。

山椒味噌いずれあやめの柏餅（拾一）

で、柏餅には小豆餡入りと、山椒味噌入りと二種類あり、柏の葉の表裏で、それがわかるようになっている。

高須＝普通（小豆餡入り）の柏餅を、タラフクばくついてから、口直しなどとゼイタクを言って、別製（味噌餡入り）をまた幾つか食い、オクビと共に柏餅は「山椒の方がうまいナ」と、ゴタクをならべている、大供の句であろう。

前田＝賛。柏餅ではないが、

こうもりに山椒食わせるいゝ時分　（拾一四）

という句もある。これは田楽だが……

岡崎＝賛。しかし「俳説ことわざ辞典」では〝鯉を腹いっぱい食ったあげくの言い草〟としている。

丸＝賛。

岡田＝「俳説ことわざ辞典」は、川柳には素人の著書だから、全面的に信用してはいけない。（難句だけ十句ぐらい質問されて、小生が教えはしたが）

なお、他事ながら前田氏引用の「蝙蝠」の句は、田楽ではない。コウモリは山椒が好きだという俗信あり、当時の子供達は、夕暮コウモリが飛んでいると〝コウモリコウモリ山椒食わしょ〟と唄った。この句の「いい時分」とは〝吉原へ繰り込むには、丁度いい時刻だ〟という意味である。

395　**向ふうらで聞ヵしやれと木薬屋**　桝水

清＝わからぬ。木薬屋があったのは、日本橋本町三丁目だが、その向うウラに何があったのか？

藤井＝木薬屋とは薬屋のことで、両国の四ツ目屋か？踊り子のいる薬研堀へ遊びに来た遊客が、当時有名だった四ツ目屋を目標に来て、其所で薬研堀を聞いた、句ではあるまいか？

川端＝馬鹿も重宝四ツ目屋を買いにやりで、何も知らずに長命丸を買いに来た使いが、薬屋が軒をならべている日本橋本町三丁目まで来て、四ツ目屋を尋ねた、のではないか？

高須＝〝大坂屋で中条を聞いている〟句と、柳雨説あれど、それも疑問。

前田＝「木薬屋」は「生薬屋」が正しく漢方薬の草根木皮を取り揃えて、売っていた店で、四ツ目屋ではない。この生薬屋は両国橋町の大坂屋平六で、場所がら踊り子との関連の句が多く見られる。

踊り子は行くも帰るも大坂屋　（タル一六）

平六で聞けと船から呼びにやり　（タル一一）

従って、主題句は、踊り子の所在を聞かれた大坂屋が「向う裏で聞きなさい」と、冷淡な返事をした、という句である。

岡崎＝前田説どおり、太田南畝の「好師労之」に〝橘町大坂屋平六といえる薬種屋の辺に芸者多し〟とあり、その付近に踊り子が多く住んでいた。

平六が向う裏かと留守居聞き　（タル一〇）

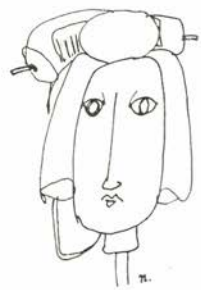
で、その平六の店員が、踊り子の所在を教えている、句である。

丸＝賛。

岡田＝同。両国薬研堀の向いが、狭い若松町、そのすぐ裏が橘町で、踊り子のソウクツであった。

女流作家による同人特集

よくぞ女に生まれける



エッヘン！女です

内藤きさ子

岩戸かぐらの昔より「女ならでは夜が明けぬ」と云われたり、天照大神が女性であられると云うことは、いかに女性がこの世に貴重な存在であるかを物語るものでありまして、女の一生を分析して、共感を得たいと思います。

○幼少時代……何と云っても赤いおべべが愛らしいですね、お正月、七五三、街を歩いていても人目を引きます。

コッポリの鈴は転んだらしい音

○少女時代……つややかな髪。絹の肌。鈴のような声。少女の愛らしさは野山の小鳥です。この頃から、男の子は、女の子の機嫌をとり始めます。

兵古帯の黄色が似合う少女なり

○青春時代……女性が最高に美しい時期、何を着てもよく似合う頃。絹の靴下に、ハイヒール、ルージュのあともくつきりと、街を歩いても目につくのは若い女性ばかり、膝下にひざまずいてプロポーズするのは男性側。女性を得んとして、しばしば男性間に暴力沙汰が起ります。

コンパクトぱちんと女気がかわり

○奥様時代……家庭の実権はすべて手中にあり。夫の手綱をうまく裁いておれば、一生、食いはぐれはありません。

お化粧は出来ましたかと電気釜

○老年時代……たとえひとり身になっても、女は重宝がられます、孫たちもおばあちゃん、おばあちゃんと大事にします。それに統計上からも女の方が十年も長生きします。

おばあちゃんの影孫の影桃の影

このほか女性には、美しい花嫁姿、母となる喜び等があります。お化粧のたのしさも女性なればこその特権です。芸者さん、ヌードダンサー、バーのマダムの美しさは云うに及ばず、すべて美の対象となるものは女です。

さあ皆さんお化粧は出来ましたか、出来たら、たのしく踊りに行きませんか。

盆おどり赤い鼻緒で行きまひよか

母と娘

高橋操子

母さんに助太刀をする片言葉

気の短い我がまま者の夫、気むずかしい姑

につかえる母を子供心に、いつもハラハラしながら、かばったものでした。

その母を兄と妹にたのんで私は十三の時、子供のない呉服屋をしていた叔父にせがまれて、もらわれて来ました。

店員三十五人、兄妹となった兄も親せきからもらわれて来た人、お義理お義理の日々の中で、こちらの親の顔をながめては、里の母の恋うのも胸の内。

母と云う字とたわむれてふく涙

簀入りの小僧一番汽車にのり

当時こんな川柳を作りながら、三年間は里へ帰りませんでした。二十四才で結婚、家を別に持った時、これからお母さんにうんと孝行をしてあげられる、それが何より嬉しく思いました。

母を訪うこの駅からは国なまり

たまさかの帰郷は母の髪をすく

古里で母のエプロン借る彼岸

母さんは肩のこらない指輪はめ

おばあさんもなくなり、少し気楽になった母をよく迎えに行きました。

シグナルは青母の手 持ちかえる

里の兄も母にはやさしく、近村へ嫁した妹に「あんたはおちらの御両親を大切になさい、お母さんの事は私と兄にまかしとき」とついに戦時中妹が表彰されました。

田舎の家は古くせめて明るい便利なように

と兄と相談して建て替えました。私の主人も共に母を大事にしてくれました。母が亡くなってから、親せきや近所の人に聞いた話ですけれど

「女の子はかゆい所まで手を差しのべてくれる」

と、非常によろこんでいてくれたとか、子はあたりまえの事をしていても母だけは〝よくぞ女に生まれける〟と思っていてくれたのかも知れません。

女王蜂

光好陽子

女のえらいところは何と云っても男の真似の出来ない子供を産むことである。子なくして三年たてば去ると昔の人は云ったが、私は東条さんの産めよ殖やせよの方針を忠実に守りよくも産んだり半ダース。

当世では五人も六人も子供を育てることは容易なことではない、やはり昔は暮しよかったとつくづく思う。

夫は働き蜂で、せっせと給料を運び、女王蜂は半ダースの子供の養育に専念した。適当に夫を座ぶとん代りにして。

三角がみごとな母のにぎりめし

つり合わぬ恋 名大に許されず

塩だけは切らさぬ母の台所

昭和二十年終戦と同時に夫はシベリヤへ連行され（満州で警察官）残された妻子は一年後、幼稚園の引卒者のように引揚げた。半ダースの子供を無事日本内地へ連れ戻ったのも私、立派に成人させたのも私。引揚げて帰ってきた当時を思い出すと、背すじがぞーっとする。明日からの生活を思えばぼっとしておられず、持っていたモールス通信の技術が身を助け、電々公社に入り十九年。今なお元気で在職中。

子供はつぎつぎかたづきあと一人、孫も二人になった。一昨年は誰からも援助をかりず小さいながらも私の城を新築した。電話もひいた。

墓場へ行くまで電々公社の年金が私の生活を保障してくれる。私の半生は小説にすればベストセラーまちがいなし。

年金がついて夫は不用品

社会事業につくした女史の白い髪

年はとっても若くても、もてるのは女、おばあちゃんおばあちゃんといそがしい。これに比べておじいさんは食べるだけで何の役にもたたない。しかしおばあさんは洗濯炊事掃除子守り何でも役にたつからよいと若い者の声をきくときはすこしがっかり、この頃の若

い者はこうも実用価値にばかりこだわるのか？

それでも親馬鹿、大いに気をよくしている。やはり女は死ぬまで重宝がられるものらしい。

愛情の優位

藤村 ♂ 女

女性として生まれてきた事をウンとえらそうに書けとの事ですが、男女平等だとか対等だとかいうのは職業や学問や法律の面の事です。

愛情には平等も対等もありません。むしろ愛情の面では女の方が深くて優位です。神様はそういうふうに人間をおつくりになりました。

女は経済にさえ独立できれば一人でも楽しく暮せます。私もこの二十年間を子供とのみの生活をして来てつくづくとそれを感じたことです。

子供の育成に力を入れ伸びて行く子供達の姿をながめて明日への希望を持つ母の心それは愉しいものです。しかし男性にはそれが出来ません。男性は一日花の野をとんで蜜をあつめ日暮れには女王のいる愈いの巣を慕ってかえる蜜蜂に似ています。

男はそこで生気を養いこころの疲れをとりもどす、女のいない夜の食卓が男にとってどんなに淋しい事か？又男という男に生きる希望と未来の夢をあたえ、行いを正しくモラルをもたせてゆく……それはいつも蔭にいる女の力でしょうね。

オカアサンと呼ばれるのも女なればこそです。保険会社に入社して早十五年目がこようとしております。木がらしが吹いて落葉が散る御堂筋を歩きながら、終戦二十年の過去を振り返りながらよくぞ女に生まれけりとつくづく感じさせられる今日此頃です。

一口に云う二十年は短かく又長がかったとも思われ、苦るしい日の多かった事も今は夢のようです。五人の子供はそれぞれ自分の生きる道に進み、長女は幼稚園教諭に、長男は工業デザイナーとして自分の力をみがく。次女三女は結婚にゴールイン、次男も今年は大学生です。いつ退職してもよいと云われながらも、せめて次男が大学卒業まで役に立ちたいと思い、今日は東、明日は西と、大阪の街を歩いておりますが、帰宅して孫の顔を見に行く時の嬉れしさ一日一日と知恵のついてくる孫をひざにだいて喜ぶのも、女なればこそと思います。若本多久志様の色紙

「**しあわせを信じて茲に女生き**」を机上に毎日を信じて働いています。

女、女、よくぞ女に生まれける。

ケセラセラ夫婦るはいつの日か
咲くならば垣根のバラよ血の如く
沓音のそのままこおる帰り路
紹介の名刺見直し腕を組む

♂ 女

女の特権

宮尾あいき

リンゴのような頬、天使のような瞳、乳房をふくみながら片方のお乳をまさぐる可愛い手。女の幸を思う最高の瞬間だと思います。

どんなお偉い殿方でも成し得ない女には母となる特権がございます。

十カ月の肉体的な苦痛と精神的な戦いを克服して、世上最大の母となる特権を得るのです。

戦後女は強くなったと申しますが、昔から女は強いのですが、世相がそれを認め得なかった事にあると思います。

母となる時間へ無我の神だのみ

私は土佐の鰹節屋の一人娘に生れました。お多福の私に母は女の特権かの如く、美しく着飾せてくれました。お多福でも女は女、年頃ともなれば、恋の囁きも何度か聞きまし

た。
愛奈されて現在の夫と結婚しました。そして常の人の三人前以上の実に九人の子供を産みました。ずらり枕を並べて眠むる子供達は正に壮観でした。だがよくもまあこれだけ産んだものだと、我ながら女の偉大さに感動したものです。そしてその子に掛ける母の夢は、七色の虹のように輝いて私の心にたまらない幸をもたらしてくれたものです。女の子は次々結婚して孫が産れました。

私が信用しますと嫁にゆき
タデ食う虫もいて長女嫁にゆき

ムコも孫も父親より私の方を、優しく可愛ゆく慕ってくれます。これも女の得点です。こうした平凡な私の生い立ちの中にも。拙い筆では書き表せない女の幸がございます。まして美しくしあわせに育った女性においておやです。

新婚時代、鏡に向って紅を塗り髪をくしづけ夫の帰りを待つ新妻の幸。
下手な子守唄で赤ん坊をあやす夫の姿に涙の出そうなほどの幸を思う妻

荒波に挑む地声で子をあやし

自分の作ったご馳走に舌鼓打つ夫や子供の様子に、胸をあつくする夕食時のたのしいひととき。
静かに眠る夫や子供達の安らかな寝息を聞きながら、今日の幸と明日への希望に胸ふくらます夜の幸。
何人もの孫の出来た現在の私でも、紅一点の美名をちようだいする女の特権もございます。

倖にすぎて倖気がつかず

女に生れて本当によかったと思いますと共に女の特権に満腔の感謝をささげます。

女は世の中の光り

小笠原　青　女

「よくぞ女に生まれける」という題で、うんとえらそうに書いて下さい。なんて新参の私に突然お葉書戴きギョッとしました。
これはひよっとすると、私の事、御存知かいな、と、どきりとした程でした。
若い頃は、「女なんていや、どうして男に生まれなかったのかしら」、などと生意気な事をいって、親を苦笑させたものだそうです。ところが、今では高血圧で、寝たりおきたり、もし私が、男だったら、今ごろどんなにして、妻や子を養ってるかしらと、そんなことを思うとうすら寒い気持がします。
この頃しみじみと、女に生まれた幸を味っておりますが、若い頃の女性はすばらしく、

あこがれが私の命火と燃ゆる
ひざまずく求愛何か道化めき
うちの娘に過ぎたる花婿もて余まし
女にはスタイルで喰う道もあり
恋をする女指にも科つくる

結婚して二、三年も、すれば、

ヨロメキのドラマ終ってさあ掃除
一大事妻の誕生日を忘れ
平和的解決パパがあやまった

そして、子供達にはしたわれよき相談相手ともなって、

何事も話す家庭に幸あふれ

女ほど強く、かしこく、優しく、世の中を明るくするものがありましようか？もちろん反対の方も、いられるでしょう。でもそれは女に生まれた幸が、わかってない方なのです
今年も私は、女に生まれた事を、感謝しながら努力して行くつもりです。
文中勝手に先輩諸兄姉の句をおかりした事をおわびします。

女は幸福

天　正　千　梢

結婚六カ月目に主人が一銭五厘のハガキ一枚で呼び出されて戦線へ立っていった。そして六年半後には敗戦。背たけ程のびた雑草を整理して、雨露しのげると言うだけのあばらやで、ささやかな商売をはじめました。

女として生まれたおかげで、仕事の方も一線には立たず、主人のおかげの力として働きながら、生花や、茶の湯のけいこ、日曜日には、天王寺の美術館の地下へ、絵のけいこと貧しいながらも、せめて心だけでも豊かになりたく、上達の見えないけいこ事に通わせていただけるのも、女なればこそと感謝しております。

昨今のように不況風が、私の家のような小さい小さい店にまで入り込んできて、主人はいつも頭を痛めていましても、女の私は、人形をつくったり、習字のけいこをしたり、不況の風が身にしみる程も感じておりません。

人生航路の分水嶺にまで、こぎつけた現在でも、金持ちと言う仲間には、到底縁がなくとも、しいて言わしてもらうなら、時間持ちとでも言えるでしょうか、店の手伝をしているとは言うものの、自分の時間を毎日持って好きな読書に酔っている事が出来ます。

なおその上に何物にもまして、三人の子供をこの世に送り出せた事を、神様に深くお礼を申し上げねばなりません。これこそ、よくぞ女に生まれけると言うところでしょうか。

里帰り四五日後まで胃がもたれ
裏話には用のない女史となり
哺乳瓶夫にまかし観劇会

女は勝負する

小林トメ子

この間保険の外交員をしている友達が来て五千万円の生命保険を加入させたと嬉しそうに語っていた。私はおどろいた。

「まあ、そんなに加入して下さったの？知ってる方なの？」と聞いて見たら、

「ちょっとした紹介だけで一対一で行ったの。でも長時間かかったわ、五十万や百万ぐらいの保険を何べんも頼みに行くのは、嫌やだから、うんとねばったの。そしたら最後に体か酒かとまで言ってきたの。そこで私はお酒なら相当飲みますと言うと、加入者である社長も豪酒家だと言うのですよ。そこで今夜行きつけのバーで勝負をしようと斬り込んできたの。

私、うんと飲んだわ。一升位かしら。社長の方がとうとうもう飲めんと弱音を吐いたの私が勝ったのよ、嬉しかったわ。すぐ加入用紙を出して社長及び社員の加入する印を押してもらったの、私酒にはのまれず、しっかりしていたわ」と言ったのには聞いている私の方が二度びっくりした。

この女酒豪家の保険外交員の胸のすくような手柄話に私は女は得だな—と思った。好きな酒を飲ませてもらってぼろ口をつかむとは女っておそろしい。こんな芸当は男性にはできないことだし、やはりよくぞ女に生まれけるであろう。こんな話を聞くと、普通のサラリーマンでは出来ない芸当だと思った。

ほろ口を聞いてサラリーマンいやになり

弱いと いうけれど

野々口美舟

昭和32年5月8日付毎日柳壇の第一席に、
家裁までいって男の子をとられ
また同じ毎日柳壇一席に、
用なしにされて姑の気にくわず
今は亡き麻生路郎先生は、つぎのように評されました。「家裁までの句は女の弱い立場をうまく詠みこなしている。この句は淡々と詠んでいるが、女性の涙がにじみ出ている」とそして「用なしの句」はひかえをなくして頭に残っていませんが毎日新聞のハンカチ半ダースを頂いたことが脳裏に残っています。

どちらもあまた数多い句の中から、しかも一席に選ばれたのです。それは私の体験句です

実に驚き入りました。先生の眼力の偉大さに頭が下りますが、さて女と言う動物は生来何かに頼っている事に幸福感を持つらしく、ひよひよの松に抱かれて楽しい一生を終る女性。微動もしない大岩石を背に抱かれて後生大事に余生を送っておられる女性。そんな中で私は一片の枝も、一かけらの石も持たない一人ぼっちの人生行路を歩む女です。それが何となかなか幸福に過していることをちよっと皆さんに照介して見たいと思います。

人間同士が信じ合うと言うことは、なかなかむずかしいものです。自分を信じ自分に頼り得るには信仰と川柳と健康の三つでした。信仰する人同士は何となく信じられ、信仰の無い人とはなかなか解け合って行けませんでした。また川柳も同じで柳友となれば何だかウマが合い何となくなつかしい。ですから川柳の何であるかも知らない人をみると何てこんな立派な趣味をどうして知ろうとしないのかちよっとさびしくなります。

私は信仰に川柳にと暗くなり勝ちなこの社会で、明るくそして楽しく、毎日をうまく過しております。明治生れの私は

犬猫のように姑の肩をもみ

やれやれ女親としての大役が終りになったとたん、

用なしにされて姑の気にくわず

結局弱き者汝の名は女なり。いいえ私は川柳と言う一本の筋金が入っておりますのでなかなかよろけませんぞ。

えらそうにみえても女は女なり
主婦の座もゆるがず主人軽う敷く
姑へ義理で笑うた一と昔

美舟

女は強し

岩田美代

半額以下の奉仕品に特売場はわき返えっていた。私はこどものオーバーを見つけて手にとった時、突然そのオーバーをひったくった人があった。見ると四十がらみのイヤなタイプの男性だった。せつかく掘り出した品物だから私はそのオーバーを引っぱりかえした。

当の男はムツとしたらしかったが、相手が女のことでもあり、喧嘩もできないとおもってか素直に手をはなしたのである。

こういう場合の女って強いものである。ささやかな愉悦感、ささやかな勝利感。

スローモーの妻とは思えぬ特売場

昨年あたりから何度となくある新興宗教の人が入信をすすめに来ていた。その日はなんと五人という団体？でねばりにきたのである。手八丁口八丁という更年期のご婦人ばかりなので、夫は私が危しとみたか、

「ぼくが出てことわってやろう」

と、その応待に出たのだが、しかし相手はさる者、夫はグングン押しまくられているのである。そこで、結局私とバトン・タッチ。

尻込みの夫に替わりまくし立て

ご近所にすばらしい見事なミンクのコートを召している二号さんがいる。いつも、サッソウとお出かけの時は、その後からパッとせぬ鼻の下の長い男性がちよこちよこついて行く。どうせ甘い鼻声でおねだりしたものであることはだれにもわかるのである。

鼻声で仕止めたミンク風を切る

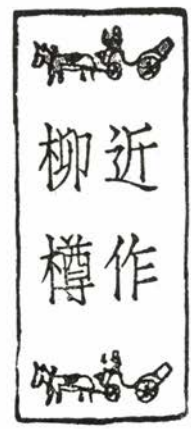
ああ、同性のなんとスバラシキ鼻声よ。私はひとごとながら、よくぞ女に生まれけるといつも思うのである。

本誌の投句には

なるべくご利用ください

川柳雑誌
特製　**柳箋**

一冊（五十枚）三十円
送料　二十円



西尾栞選

大阪市　吾郷玲人

拝観料坊さんどつこいしよと起てり
冬眠をする店もあり嵐山
北野から都の春は綻ろびる
嘆願のように参賀の記帳する
火を出すなかぜをひくなと気象台
みの虫よ一緒に唄えはーるよこい
色街の昔を語るホルモン屋
ええおなごじやつたと坊主独り言

石川県　同村虹要

辞表ふと思う子の顔妻の顔
苦学した息子へモダンな嫁が来る
学歴を気にする部下と飲み歩き
老人を乗せる車掌の肩が濡れ
見合写真の出来栄えわたしでないわたし
結婚写真ないけど仲のいい夫婦
悪うございましたと少し腹を立て

竹原市　三宅不朽

雪しんしん喪服の肩を刺すごとし
空の青かきむしりたい日の孤独
流木のたしかに浮いている不安
目を閉じてあるかなきかの初恋よ
たとえばのたとえまずい眼に出遭い
発車ベル裾の乱れもなんのその
手袋の片手落ちている不運

七尾市　松高秀峰

松の内子のピストルへこけてやり
お正月やつぱり読めぬ軸をかけ
子に子の言い分があり家族会
こう言えばああ言う子供に育て上げ
成人をパパが祝つて一人飲み
セールスマン名刺はみんな主任さん

名古屋市　吉田水車

絆とは電波のようなものかいな
逞しと言えば逞し都会の灯
末席の声はとどかぬ会議かな
お伊勢さんどっち向いても有難し
お手紙をくれと言うのが別れにて

竹原市　小島和幸

割勘で女同士の味気なさ
試験勉強時計も雑音の一つ
まだ勝てる勝てる九回裏となり
幻を慕うてふらふらと街へ出る
子の寝顔ある時母に父に似る

尼崎市　岡本昭三

ほんとうはお金が好きとなぜ言わぬ
暮れの汽車混んでそれぞれ故郷があり
初日の出拝む二人もバスの客
冬眠をあわてさせてるビル工事
ヘルメツト男らしい職に生き

香川県　三井酔夢

父親へ女になつた娘の羞恥
足音も派手百点の児が帰り
愛うすき妻なり犬とたわむれる
弱音などはかぬ女の意地かなし
雪となり捨てた仔犬を探して来

羽曳野市　谷垣史好

バスタオル声まで甘く濡れてくる
わが事に悔なし男の高いびき
何もすることがなく眼鏡の玉を拭く
着実に且つ明瞭に禿げてゆき
寒風へ男二人の歩調合い

愛媛県　嶝本満子

魅せられたバストの線が徐々にずれ
愛情のもつれ絹糸のもつれに似て
明治生れ一円貨を拾い上げ
瀬戸物のふれ合う音で怒気が知れ
遺産分け血で血を洗う羽目となり

島根県　堀江正朗

悔多く残したままに年は明け
入試の子正月もなくようねばり
塩水を飲んでる鯛の甘い味
新しい意慾をもやす初仕事
里帰り母になる日をそつとつげ

羽曳野市　江城功雄

不景気が故郷への道を遠くする
ともすれば愚痴のこぼれる晴着着せ
職去る日煙突無心に煙吐く

ふと吹いた口笛遠い日の軍歌
愛媛県　関本柳剛

我こそはミス病院の靴の音
飲みつぷり薬と見えぬ顔を上げ
これ程の嬉しさ枕返すだけ
明日知れぬ療友へ嘘は許される
大阪市　森本良夫

恰幅のよさが代理と思わせず
除夜の鐘を携帯ラジオが移動さす
静かなる元旦子らももう大人
倖わせがいつぱいと言う顔ならぶ
八幡浜市　平田砂生

うす化粧してボーナスは迎えられ
成金の前から道路横に折れ
教え子を見る目妻にはすまぬこと
見ぬふりをすれば転んだ子は笑い
岡山県　尾田水仙

忙しやもう鳴りにけり除夜の鐘
新調の晴着ママと同じ柄
恐妻もおらねば淋しい日が続き
額の裏紙幣もネズミの巣にまじり
尼崎市　岡本利子

うつむいた机に智恵が出るでなし
月賦でも結構ですによう買わず
右側へ散歩の犬に引つぱられ
死亡0の幟が事故の血をあびる
尼崎市　吉川イツ子

駅までを五分で走るハイヒール
あの人の心嫁ついでから気づき
失礼に着替えの部屋に酔うて来る
冬山で誕生祝いしてもらい
尼崎市　海士天樹

感動の彩塗りつぶす白である
閉ざされた心に光る和を信じ
栄光の寂しさ知らず紙吹雪
傷つける言葉で愛をさとられず
大和郡山市　中内孚彦

サルトルを読む友川柳捨ててゆき
仔猫もう主人の機嫌心得る
妻の嘘子供達を味方にし
日曜大工一寸しては一寸やすみ
島根県　鈴木村颯子

還暦の元旦妻と初詣で
老妻へせめて風上歩いたろ
師走風易者の髭が揺れている
仲のいいいかけ屋夫婦見て通り
倉敷市　水粉千翁

間に合うた仕立直しで初春が明け
階段を転んで来たとまで言わず
ふるさとへ風の便りを恥じるまい

いななけば春はただおおらけく明け
高知県　山川勝子

三カ日小原庄助さんのまねをして
正月も八日鞄にせがまれて
白髪なら染めもしように禿げ上り
レーシングカー子より大人がよく遊び
羽咋市　三宅ろ亭

あいつまだ生きてるらしい賀状来る
流行語園児とつくに知つて居り
限界がきたか酒豪の盃を伏せ
同窓会劣等生が巾きかせ
青森県　岩淵一星

雪国も脛を出させるデザイナー
食堂は馬鹿にしたよなお茶も出し
台風のたたり初春から借が出来
酒飲めるだけが舅にある魅力
福島県　佐々木ゆかし

控室陽だまりの方に人が寄り
来賓席貫禄の順に眠くなり
初孫に姑妥協の腹きめる
玉島市　井上旭峯

着物着たガイドは別な声で逢い
罪のない路傍の石を蹴つとばし
あたらぬと知つてもやつぱり雀逃げ
布施市　坂東若芽

除夜の鐘かき消す如く救急車
お元日もう救急車三台目
やれやれと座れば猫が来て甘え
竜野市　森下峰子

白壁のシミにタンスの位置をかえ
足を組む男意外に背が低し
拒絶する何ものもなし女なり
鳥取市　近藤秋星

腹に手を置く癖妊娠して以来
春の海入試地獄を忘れさせ
火事のたび消防力を批判され
広島県　南条露声

オトイレへささされた花は不倖せ
来年へ間に合う妻の毛糸編み
ええとこのばあちやんなのか達筆家
北九州市　三上春雄

希望だけきく人事課のエチケット
目の上のこぶお姑の長寿法
計量とは違つた一姫二女三女
長崎市　甲斐笊柳

サロンパス仁丹にんにく満員車
見学に議事堂デモの包囲戦
乾杯のあとは幹事と泣き上戸

孝養の一つ空港へ出迎える
正月の出勤へ妻も愚痴云わず
初風呂へ女正装して出かけ

大阪市　西本保夫
小松市　田島健二

宇宙まで逃げたい気持皆なもち
恩給で食えて近所の世話をやき
ダムになる村を観光バスでぬけ

松山市　河本南牛史

均一の店を覗くも世帯ずれ
忘れずに古木の梅も花をつけ
後妻にも尻に敷かれて米寿まで

名古屋市　花東千久良

アイシヤドウ度ぎつい女ギヤングめき
情過剰ふたりは若い旅鳥
階段を数えて齢をほめられる

大阪市　長谷健生

二年過ぎついに五輪貨もうまじり
いくつかの見合結局はじめの娘
隣組みんなバーです宗右衛門町

大阪市　今井岳太

正月は雪が欲しくて雪国育ち
恋をして芯の強さをみせた君
初恋の愁いに似たりすしのさび

奈良市　村上春已

血圧を二合過ぎたらもう忘れ
新年もパパの大声からになり
美しい女で美しくよう生きず

松原市　守屋万竿

代議士の賀状今年も粉骨砕身し
議員からはたちを祝う賀状が来
床の間に先ず春が来た年の暮

神戸市　吉田隆史

朝湯と朝酒日曜の和服着て
かさだかで男が邪魔な連休日
泣きやんで寝たから重い孫を抱き

仙台市　平野光道

助け合いのためだと押売が来る師走
尺貫法の物指家宝のごとく所持
愚痴を言う妻に背をむけ爪を切る

倉敷市　水谷谷水

スモツグとラツシユは大阪並の町
焼香もサツと済ませて記者らしく
遊ぶにはいいが後妻にや向かぬ由

和歌山県　山本泣笑

白髪もう気にしない妻となり
荒れた胃を七草粥に労られ
孤独悲し浪花千栄子を母の夢

人生の甲乙丙の乙に生き　松江市　岡崎祥月

平凡に生き五十五の新春となり

勧告の年が俺を追つかける　島根県　堀江芳子

貧しさに耐えて静かに除夜をきく

癌だつた友は生きてた賀状来る

初風呂へ一家支える身をしずめ　大阪市　脇通隆

山鳩はずるいと思う散弾銃

宝くじ抽籤日までは俺のもの　羽曳野市　杉本白扇

水ぎわを境に積む雪消える雪

何処やらに愛嬌があり種が島　岡山県　瀬戸山文平

元日がもう暮れているのも知らず

日本の倖せ元旦の陽がまぶし　大洲市　堀内暁風

芋畑胤の知恵に追いつけず

子の希望親の希望と喰い違い　大阪市　田くり坊

十円の値うち子供が外に出る

強気にほえたが餌でだまされる　寝屋川市　福富隆子

アパートの前にこぼれたような子ら

妊婦服にすれちがい又すれちがい　堺市　斎藤亜也

丹前はウール炬燵は赤外線

ダウ高値また寝てる子を起しちまい　宮崎市　野口卯之助

月賦とは縁が切れない妻の見栄

寝敷した服がするめのようになり　大阪市　豊河好永

絨氈の色に人柄しのばれる

千円がもうなくなつている市場　高槻市　山田スミ子

晴着にも犯罪があるお正月

出して見りややつぱりボタンとれたシヤツ　笠岡市　谷本鈍愚坊

世は変る夢の余生を遠く生き

新予算またも庶民に遠くあり　茨木市　高木繁太郎

初詣パパは抱つこしママお伴

枇杷の花散つて恰かも氷雨霰　わたなべかずこ

無茶苦茶の句を川柳と言つて悦

ゴメンネと言えぬ強情肩がこり　伊丹市　中島憲昭

好きというただ一言が口に出ず

羽子板を抱かして撮りたい娘に出合い　河内長野市　森本黒天子

御無沙汰を口ぐせにして年が明け　宝塚市　引野公江

横顔が美しく横顔ばかり撮り　堺市　大谷幹子

（ありし日のブライス先生）

ブライス先生の憶い出

――冨子未亡人と語る――

阿部佐保蘭

一月七日大磯の今は亡きブライス先生のお宅を始めて訪問する。先生のお好みそっくりの十畳の御部屋に可愛い仏壇が東向に安置してある。初対面の挨拶後御線香をあげさせて戴く。御遺影と並んで御位牌に

不来子古道照心居士　昭三四、一〇、二八歿

とある。川柳に対する御功績に対し、心からお礼を申しあげ、先生の御冥福をお祈りする。奥様のお話によると不来子というのは先生の師であられた禅の鈴木大拙先生がつけられたもので、遊びに来い来いと云うのに来ない子と云う意味の由、之を聞かれた円覚寺の朝比奈宗源師が、何々院というより不来子の方が先生らしいと云うので、それに俳句、川柳、禅のような古い道に専念されたと云うので右の様な戒名が生れし由、先生はロンドンに一八九八年十二月三日に生れられ、ロンドン大学在学中、最初印度に心惹かれて居られたが、ある時硯の蓋の蒔絵に葦の葉が風に揺れている写真を見られ、日本に心惹かれし由一九二四年文部省から招聘され、京城帝大に英文学を講ぜられ、その傍ら大拙先生について禅の研究をされ、京城は妙心寺別院に参禅され由、その京城時代に今の奥様と藤井教授の仲人で結婚され、春海、なな子の二女をもうけられし由、京城時代に禅の著書即ち

"Zen In English Literature and Oriental Classics" 及び "Zen and Zen Classics" I、II、V を生前に、III Histovy of Zen IV "mumonkan" (part V) を死後に著わされた。ついで金沢四高に移られた。世界大戦が始まり最初金沢に続いて神戸収容所に収容されたがこの神戸時代に俳句の著書 (Haiku Volume I—IV、History of Haiku Books I、II) を大体完成され由。川柳の著書即ち (Senryu 及び Oriental Humour 及び Japanese Life and Character in Senryu 及び Edo Satirical Verses. は大体その後の学習院の宿舎時代と云ってよく、最初の本が一九四九年、次が一九五九年、次が一九六一年二月十五日次が同年九月十五日発行である。その中の Senryu (谷脇素文の漫画入英訳川柳) は内地は勿論海外でも凄く好評で、現在でも各方面から求められるのであるが、先日北星堂に電話したら、惜しくも絶版となりし由、(この稿を書き直している現在冨子未亡人と小生達の願いを入れ、稿を改め北星堂社長が再版発行を言明されました。これは特筆大書すべき大ニュースで改めて柳界を代表して中土社長にお礼申しあげる。この漫画入りと云うのが外人に凄くうける。即ち浮世絵と又違う川柳のよさが一目で外人にも理解出来るらしい。勿論先生の訳がワンダフルの故もあるが、先生は持前の謙虚さからこの最初の出版物に対し、幼

稚だと凄く謙遜されていた。先生は学習院時代毎週木曜日に皇太子殿下の家庭教師を二十年間もやって来られ特に皇太子殿下に和歌俳句よりも川柳の英訳をお進講なすった（美智子妃殿下にも）これは次の世代を背負って立たれる皇太子殿下に仁徳天皇の民のかまどの貧しきを煙によって知られし如く、所謂庶民の詩―川柳を英訳することに依り、昭和の風俗習慣を知って貰い、人情の機微に通じた立派な天皇になられることを祈念しての事と察せられる。誠に有難き極みである。皇太子殿下に例えば落ちているハンカチは皇太子だから、真先に拾わねばならぬと教えられたのも先生である。こう云うお話は数えあげれば限りがないが、自分の良さとか功績と云うものを絶対に人に語らない方だっただけに先生の御意思に反しそうなので割愛して主として川柳に関する先生の御業績に触れさせて戴く。先生は一つの句を英訳するに当り、奥様並びに秘書の方の意見をも参考に聞かれ、時としてその句に対する意見が奥様と相反する場合もありし由、そう云う時ベテランの雀郎先生のような方が、傍にいて貰えたら、もっと完璧な英訳川柳が生れていただろうとの事でした。とにかく川柳の英訳は難しい。故慶大教授堀英四郎先生も絶対に先生の支持者で、我が亡きあと川柳の英訳を託せる方は学習院のブライスさんか、元ＮＨＫ会長の野村さんかと教えて下すった。今その先生が、雀郎先生の自選三十五句を気持よく引うけられ川柳雑誌四百号に名英訳を発表して下すったのは、有名な柳界の話題であったが、その後小生が贈った拙著「鶴の姿」の返書の中で「あなたが親切に私に贈って下すった書物に対し深甚の謝意を表します。その書は色んな方面に非常に有益でせう。禅の書物の続きと俳句の歴史の第二巻の出版のさ中の上に、私は「日本人のユーモア」（交通公社）の発行を始めた。その書に対して私は既に武玉川及び柳多留から非常に沢山の句を拾いました。私は既にあなたの川柳の中から何句かを選びつつあります。そして私は私が前巻にものした処の川柳の英訳の歴史に就ての説明を是正し大きくされんことを希望します。」とあり、謙虚な先生のお姿がここにも髣髴されるのである。私が嘗て先生の最初に著された川柳の本の中の川柳作家の雅号の誤りをいくつか訂正してその礼状をうけたことがあったが、今度はこの御要望に応え切れない中に先生の急逝に遇ったのは返す返すも残念である。先生の御功績は急逝当時の即ち五十三巻十二号の川柳番傘（ブライスさんありがとう……堀口欣一）日本大学英文学会だより第三四号（中島邦男氏外四氏の先生の追悼文）その他に尽されているので、ここでは世間に未発表の先生の辞世の句に就て、誌させて戴く。先生が、脳腫と闘って居られた頃、お見舞に来られた御近所の奥様に、うちの庭の中でどの花が一番先に咲くかと訊かれたので、山茶花ですとその奥様が答えられたら、そうかと云われ、暫く考えてから、

山茶花に心残して旅路かな　不来子

と英語で云われし由、これは発表もされず奥様も直接聞いて居られないが、先生が一生の中に作られた川柳の二度目の絶唱となった次第である。第一回目に作られた句は新聞その他にも発表されたことのある句で、ここにその句を掲げさせて貰えば、

木の裏に青き夢見る蜾蠃（かたつむり）牛　ブライス

最後に先生愛用のピアノと御一緒に御遺影をカメラに収めさせて戴き、先生の手造りになる離れの二階家を心行く迄奥様に案内して戴き、今更その川柳の英訳だけでなく日曜大工の方でも所謂一家を為して居られた事を知り、一方の雄となられる方は何を為さっても立派なことに一しお尊敬の念を深めた次第である。書き誌せばまだまだあるが、又のチャンスに譲って「倶遊仏心光明中」と朝比奈先生が告別式に持参された床の間の色紙を右において飾られた仏壇に心からお礼と御冥福をくり返し申しあげ且つ祈って、夕方五時近くワンマン吉田元首相のお邸宅にも近い閑静なお家に惜しき別れをつげる。

山茶花に心残せし師を憶う　合掌

――一九六六年一月七日――

王昭君の墓

——大陸放浪——

東野大八

昭和十九年の初め、私の部隊は蒙彊の厚和というところに駐屯していた。今思うと南方転戦の仮の宿というわけだったが、二年間の軍隊生活のうちで、ここのわずかな生活が一等落ちついた、快適な日々であった。

ある朝、突如非常呼集がかかった。日曜日のことだけに泡を食ったが、とにかく息をもつかせず戦時行軍させられた。フーフーいって着いたところが楡の疎林に囲れた寒煙漠々たる一部落。

二時間の大休止で、めしも食い一寝入りしたが、ころ合いをみて、全員徒手で集れ、という命令が出た。わざわざ馬に乗って土方と異名のある小男の中隊長が、開口一番こういった。

「この中で王昭君のことを知っている奴はおらんか」

中隊三百余人の大半は召集兵なので、そんな故事など平つちやらのものも少くないが、誰一人手をあげない。軍隊というところは、なんにも知らなくてもいち早く手をあげたものが勝ちで、威勢のいいほど覚えめでたく進級も早い。だが、くたぶれた召集兵にとってはそんなことにはとんと無頓着。黙ってじっとしている方がスタミナも消耗せずにすむと一様に考えている連中ばかりだ。

「知らんのか、情ない奴らだ」

特進中尉の中隊長は、猪首をすくめて苦々しくいうと

「では、ここにいる見習士官が現場で説明する。みんなあの土盛りの方へ行け」と馬から下りた。

土盛りは高さ十メートルばかりの雑草におおわれた小山で、子供の遊び場にもってこいのようなしろもので、二山になっている。正面に巨大な石づくりの顕彰碑みたいなのが四本建っている。風雨にさらされ、細かいその碑面の文字はかすれ、傷き、下の方は青苔がはびこるままだ。ねずみ色のその寂びた位牌型の四つの碑は、蒙古語と中華語で、空をさえぎ数本の松の大木と楡とで、至極うつ然たるたたずまいをみせている。

群ったわれわれの前に、やがてその見習士官が立った。眉目清秀、眼鏡をキラキラさせて、一見、学校の教師タイプ。

「この土盛りは墓である。墓の底に眠るのは王昭君という蒙古の王女である。王昭君のことについては、自分より詳しく知っているのもこの隊の中にいることと思われるが、一通りの説明をこれからやる」

王昭君故事は、この見習士官の話をかりるまでもないので、私がかいつまんで説明しよう。

漢の元帝の意寧元年（西歴前三十三年クレオパトラの自殺したころ）北方から漢朝を脅す匈奴を手なづけるため、その大酋長呼韓邪単子に皇女をさし出した。政略結婚である。皇女とは実は替え玉で、後宮の女官からミス宮中を選び、皇女に仕立てたわけだが、何分未開の蛮地へ人身御供となって出かけるわけだから、女官たちは大恐慌である。そこで選衡用のため元帝の許へ差出す肖像を描く御用画家毛延寿にワイロを贈って醜女に仕上げてもらった。今日ならコンテスト用の写真で造作はないが、当時のことだ、彩管に頼るしかない。

昭君は、そんなインチキがきらいで知らん顔をしていた。だから実物通り描かれて、たちまち花嫁ときまった。決定したので元帝に目通りしてあいさつしたが、元帝も一眼彼女をみてアッといった。こんな美女を…と思って口惜しがったがあとの祭り。

王昭君はかくてきらびやかな北京の宮中を後に、胡砂吹く朔北の蛮地へと旅立って行くことになる。中国の古典には〝昭君怨〟〝昭君思夫〟など数多の京劇やうたがあるが、絶世の美女がお国の人柱になっていくことに、当時の連中は感傷と悲愴感と側隠をごっちゃにして、送行のたむけとしたものらしい。

傾城傾国の楊貴妃や西施、褒似、妲妃、香妃などとその古典には、悪女、妖女、奇女たちはキラ星の如しだが、なかんづく王昭君はその至純至高の点では抜群、それだけに、庶民の哀切も一しおであった。

そんな彼女なんだが、実説では大酋長の嫁となって二子をもうけ彼の地で死んだ。コトがコトだっただけに、第三者の方も昂奮していたわけだが、当人とすれば孤独、寂りようは初めのうちだけで、郷に入れば郷に従え、他家へ嫁にいけばその気になるのが御婦人のサガで、とやかく他人さまがせんさくするほど深刻なものでもなかったらしい。北京宮中で一度お手がついたっきりで、婆さんになって死ぬより、ちとケモノ臭いが蒙古王のスーパーマンぶりの男性美にかき抱かれてシビレている方がナンボ幸せなことかしれない。

井上靖が彼女のことを書いているが、人間その身になってみないことには、幸か不幸が図りようもあるまい。かえってそのフイクションのくだらなさを、彼女ハラの底からワラっていたことかもしれない。

現に彼女の墓は御亭主らしいのと並んでのその比翼塚である。四基の蒙華顕彰牌のことなどトンと無関係の顔で、亭主とともに蒙彊の土となりおうせているわけだ。

ガイドの見習士官の説明が終ると、私はその塚の背面からゆっくりとその土を上った。一面野菊の花塚であった。薄紫のその土の塊りは、黒くしっかり押し固って外部の風や雨露をがんこに拒否しているかのようであった。この下に眠る昭君の肉も骨も、それからなる美形のすべても土にしみ通りその痕せきすらないであろうが、その魂は、仰ぐ松影のうすくらがりからさしのぞく広い空天の底にとけこみ、天の川の美女と化し去ったことであろう。

人間の一人としての個々の歴史はそれはそれなりの意義や目的を、ご当人が意識するとしないとにかかわらず、生きてある限り、この世に時間的存在価値を示していくものである。王昭君の場合は、その運命の哀切さが感動となり、ロマンを作り、歴史の片隅にその名を止め、異郷の地にこうした巨大な塚を残して消えている。

だが、そこに逍遥した異国のカーキ色の人間どもは、日ならずしてあのたくましい中隊長以下ことごとく沖縄の兵火に消えうせてしまった。彼等には名も墓も魂も何も残らなかったのである。

生きながらえた私は、よくこの昭君の墓を想うが、私の冷たい隻手の切株は、この塚の上にうごめいた数百人の人間を、そうろうたる幽鬼の群とも感じとって、傷つき生き残ることの虚しさに暗然となる。それは王昭君という絶世の美女の墓であることによって一層その実感は強烈なのである。

・中級川柳講座・

いのちある句

（1）

戸田古方

美術の展覧会にゆくと、あんなのどうするのかと思うほど馬鹿でかい作品がならんでいます。あんな大きな絵はどこへ飾るのかと誰もが不思議に思います。しかし、あれは飾るのが目的でなくて、画家の実力テストの試験用紙なのでありまして、大きくなればなるほど、まとまりも悪くなり、余程の力量がないとこなし切れるものではありません。つまり、大きな絵を描くことによって、腕を試しているのであります。大きな絵を描いたあとで小さいものを描くと、実に楽に、しかも、うまくできるものです。

こうして文章を書いていても、ほんとうは短かくきびっと書けたらよいのですが、はじめはやっぱり思う存分書きまくってみた方がよさそうです。しかし、長い文章を書けば書くほどボロが出るのは絵と同じです。それで作家の真価を云々するのにはやはり長篇によらなければならないということになります。

短歌、俳句、川柳、詩を短詩型文学とよんでおります。詩には長篇の叙事詩もありますが、一般に短いものが多く、ことに短歌の基準は三十一音字、俳句、川柳は十七音字で、息ということからいえば大へん短いものであります。

戦後間もない昭和二十一年十一月号の雑誌「世界」で桑原武夫先生は「第二芸術―現代俳句について―」を書かれ、随分話題をよんだものでした。

「川柳塔」第三号（十二月号）唐崎専翁さんは「川柳塔と川柳の使命」の中で

「曽て、京大の教授、桑原文博師の言に、短詩型文芸は、一般文芸に比して、第二芸術に過ぎないと批判されたこともあるが、たとえ第二第三芸術であろうが、川柳には川柳の使命があり、ロゴス文学の中の短詩型として最も技巧趣味の豊富なものとされている。斯うした見解から行き進むと、遂作風を詩情豊かな文学境地へと、上を向いて進渉したくなるのであるが、やはり川柳の領域と使命があると思う。」（四六頁上段三行目より十二行目まで）

以下、かいつまんで申しますと、川柳の名をかえてみようとか、いたずらに風格の向上を望んだりするのは角を矯めて牛を殺すことになりかねない。牛は牛づれ、馬は馬づれ、変体短詩の奇型児は見苦しい。どうしてもというならば川柳をやめて、第一文芸の世界へ雄飛すればよいといっていられます。さらに「川柳はその使命としての、軽妙、洒落、滑稽、機智の許された融和と応用と円満な川柳庶民否文芸愛好家大衆の憩い場となるのは吾が川柳塔に附与された天来の使命ではなかろうか。」と結んでいられます。

この専翁さんのご意見には賛成であります。分をわきまえ、分を守って、へり下った心と共に大それた野望を起さないことこそ、人間として磨き上げられた川柳人の態度でなければならないと思います。川柳は川柳する

・落語のさげ・

二代目柳家小さんの「碁どろ」や「らくだ」を聴いていると、知らぬ間に、下げがきてしまった。何回下げをきいていても、ああ、下げだったのかと、あとから気がつくほど、あっけなかったが、帰りみちで下げのあたりを思いかえしてみると、ひとりで可笑しくなり、アハハと笑ってしまうこともあった。

これが名人というものかと、よく落語好きがあつまって、話してた。

「わらい」というものは、腹の底からこみあげてくるものでなくては、本当のわらいではない。この辺は、近ごろの「ユーモア」とは大分ちがうのだが、これは、世の中が、進んだようで、暗くなったせいだろう。

川柳は、川柳家を笑わすのではない。世の中を笑わすのだ。というぐらいの意気込があって、句が作れないものかと、いつも思うのだが。

もう下げに近い落語の席をたち　（B）

人々をその境地に導くのが本命で、路郎先生のいわれる人間陶冶がここにあるのであります。それ以上、敢て二兎を追う必要もありませんが、川柳には突飛な躍進を、又脱皮や改革をしないで、奇型児にもならないで、立派な文学作品にはなり得ないものだろうかと此頃しきりに考えるのです。そういう可能性があるのかないのかはこれから考えて見ようと思っているのであります。

それでまず、先程申しました桑原先生の「第二芸術」にふれてみたいと思います。川柳や俳句をふくめて短詩型文学などいういい方自身、すでに「思い上っている」と桑原先生からお叱りをうけるのではないかと思いながら先生の論文を久しぶりに読み直させていただきました。読ませていただきながらとった私のメモからはじめさしていただきます。

冒頭、有名、無名作家の十五句をあげ、菊作りを見ているのと同じ程度の退窟をした。菊ならまだしも、理解も出来ない句を読まされては安定感さえうばわれてしまう。この句の理解にはパラフレーズが必要だが、同時代の、同じ国語を使っている人間にパラフレーズしなければ理解出来ないとか、作句経験のないものに理解出来ないというのはこまったものだといっておられます。ベテランと称する人と馳出しと区別出来ないのもおかしい。つまりは個性がないといっておられるのかと思います。作者に箔をつけるために俗世間の地位を持ち出したり、神秘化するために、「さび」「しおり」「軽味」というような経文を持ち出して説教をしたがり、雑俗、脱俗の理想をかかげて風雅の隠者におさまりたがるといわれます。その様な弱さが迎合を事とし、芭蕉自身西行や杜甫へ逃げようとしている。だから近代文学なんぞにとうていなりようがない。もし真似をしても、全くの根なし草のようなものにしかなりようがない。いまの現実的人生など俳句には入り得ない。余技にあらずして何ぞやという所から、俳句は「芸」であって「芸術」ではない。「第二芸術だ」といわれるのであります。末尾に於て、「床屋俳句あるいは川柳」ということで川柳ということばをはじめてつかっていられますが、

「私はフランス滞在中、インテリの会話さらに下宿の食卓の談話にすら、下手な附合に劣らぬ言語の芸術的使用を認めることがよくあった。ところでフランス人はその巧妙な言葉のやりとりを楽しんではいるが、これを芸術などとは夢にも思っていない。」

そして、一番しまいに「自然または人間社会にひそむ法則性のごときものを忘れ、これをただスナップ・ショット的にとらえんとする俳諧精神と今日の科学精神ほど背反するものはないのである。」と結んでいられます。

もちろん、意味を取違えているかもしれません。不勉強な私のことですから、勝手な解釈やとり方をしているかもしれません。せいぜいお叱りや、お教えをうけるとして、このメモにもとずいて話をすすめたいと思います。

雅号ぶっちやけばなし（9）

・野村味平・

・あじへい・

・のむら・

二十七、八才の青年時代の私はカミ剃りのような気性の男でいけないと言われて、麻生路郎門に這入って、川柳をやれよと然る故人の閑僚に列したこともある政治家から、一壺（いっこ）と雅号を付けて貰ったが、どうにも気に喰わないので、一壺子（いっこし）と自分で付けてしまった。ところが、句会に出席すると、チョッコシと口の悪いのが居って呼ぶので、これは俳句の雅号にしておくことにして、姓名易学の熊崎健翁門下の逸材が当地に滞留していたので、川柳も進めるかたわら、姓名易学の劃数もチョッコシ覚えて、自分で味平と付けて見せたところ、だいたいよろしいとのことで、それから大いに味のある作句をと思い立ったが今だにゴツゴツした句ばっかりを作句している始末です。

無職・六十一歳

明治川柳と風俗

——（十）——

奥津啓一朗

貸馬車

馬車賃は、一里一疋引金二分、同二疋引金一両で、半日なり、終日なり御用に応じたものらしい。

二頭曳さはさりながら借りたもの　蛙柳子
三越へ三十日払の馬車も来る　貴久粋
駆者ぐるみ馬車借りにやる新華族　虹衣
借り馬車で夜会に臨む新華族　蘆村
夜会には借馬車で行く新華族　浅峰
囚人護送車には窓がないので二頭曳窓のないのは哀れなという句もある。　柳葉

書生

書生とは勉学の時期にある者という意である。明治も初めの頃には、和学書生、漢学書生、洋学書生の三様あり、和学書生は袴の紐を前に正しく畳んで結び、洋学書生は袴の腰板に紐を掛けて前で結び、漢学書生は腰にきまって手拭をぶらさげていた。

漢学書生は概して洋学を嫌い、夷狄の学問といって相反目し、和学書生もまたその主張を異にしていたが、西南戦争後には、明治政府の学制改革のこともあり、こうした反目も次第に薄れ、同じように自由民権の思想にかぶれて行った。

大臣の昔を問へば書生げな　六厘坊
書生でも若様署は嫌いなり　不安坊
琵琶を持つ書生キチンと燃が合ひ　蔦雄
すき鍋で書生旧交温める　江畔
貧書生雑誌口調で伯母を説き　赤城子
千束（たば）と読んで書生は笑はれる　古蝶

老書生無芸とあって真面目なり　あやめ
官報を開けて舌打つ老書生　柳葉
八当り猫を書生は掃き落し　葉舟
筆談に欲をならべるチャン書生　沙骨
薬局の書生窓から品定め　国光
江戸ッ子が出ると書生がうるさがる　笠天坊
手ランプを持て書生は宿を替へ　柳水

「青年」（森鷗外）に薩摩がすりのあわせに小倉のはかまをはいて、同じかすりのあわせ羽織を着ている。かぶり物は柔らかい茶褐の帽子で、足には紺たびに薩摩げたを引っ掛けている。あたりまえの書生の風俗ではあるが云々とある。（これは明治四十三年の作であるからその頃の書生風俗とみて引用した。）

私がなぜこうも服装にこだわるのかというと、大正の末年頃までは外見をみただけでその人の職業や身分地位がわかったのだ。例えば職人に例をとっても、大工、左官、畳屋など道で逢っても、その職業が一見してわかった。

これは余談だが、建材店を経営していた父は、職人気質で工事場に行く時にはかならずその組の印絆天を着ていき、工事場によっては組も違うので日に二度も三度も着替えていた。

この印絆天というものが又一種の誇りで、大店とか、お屋敷とか、組例えば清水建設とか大成建設というところから盆暮れに出入りの親方衆にその分に応じ、何枚か宛貰うのである。職人にとってはこのお出入りということが又大切なことで、出入り差止めという事にでもなれば廃業せねばならぬ事もあった。

私は不肖の子で家業は継いだが、遂に袖を通さなかった。私の罪ばかりでなく、時世がそうもさせたのである。現今のように洋服一点張りとなったのは関東大震災により、仕事着としての洋服の便利さが一般に普及したからだ。

折柄に客あり書生眼をこすり　洗流

兵児帯を巻き〳〵書生ドーレ也　暁天
玄関番屹つと取る気の博士号　一升
止む事を得ずして書生逆立　喜童
下女書生止を得ずして能が好き　一柳
白面の書生放逐に下女狗し　髯奴
「広辞林」には他人の家に世話になって、家事を手伝いながら勉学する人。ともある。
書生部屋畳彩色模様也　六三四坊
絵葉書で装飾をする書生部屋　不二丸
書生部屋炬燵櫓を机にし　いしば
書生部屋鉄亜鈴など備へ付け　含笑坊
書生部屋ペンで机へ入墨し　一昇
書生部屋規則は張った斗りにて　玩月
箒先き盒の飛ん出る書生部屋　深山
寸鉄の二字を掲げる書生部屋　散蓮華
書生部屋怪しい毛だと騒ぎ出し　春花
七曜を本箱に貼る書生部屋　葉舟
焼けるまで待ち切れないで書生部屋　豊海
書生部屋火箸渡して餅を焼き　秋香
割前で肉を突つく書生部屋　三四郎
書生部屋空中楼閣画いて居　柳渓
書生部屋又始った論の声　天庵
書生部屋霊魂論に花が咲き　琴水女
書生部屋マダムが成ると論がかん　笑粋
宰相も耳を傾く書生部屋　亥童
書生部屋通る娘へ点を付け　東郎

金泥集

麻生葭乃選

「犬」

としよりの話題遊山に来ても犬　千夏
別邸の犬縛られたままで泣き　弥生
忠誠をしいる牛乳犬にやり　酔夢
停留所今日も鍵っ子犬をだき　青女
犬の蚤とるも日課に割込ませ　千梢
ファッションの通り犬の毛刈り込まれ　小石
犬病気人間様の倍とられ　同　みよ
へそくりで万の小犬が数生れ　同
団欒に犬も座席をあてがわれ　同　勝子
番犬が主人の足音聞きわける　同　あいき
押売りと知って忠犬寄せつけず　同
忍び込む家の犬から手なづける　同
犬に生れた幸思う雪の朝　同
めいめいに好きな犬居て老夫婦　花梢
市場籠犬四つ辻まで来て帰り　同　阿茶
孫よりも犬がお膝を占領し　同
我家もないのに高い犬を飼い　操子
散歩さすひまもないのに犬が好き　同
ワンワンの片言だけが先に云え　きさ子
可愛がられても鎖の邪魔な犬　同
愛犬を死なせのみとり粉が残り　清子
浮浪者の目に犬小屋の立派すぎ　同
遠吠えが夜を一層無気味にし　一栄
雑種でも飼えば可愛いうちの犬　同
血統書づきの犬にて手がかかり　同
産院の掲示板犬の日を竝べ　同
佳作
捨てられる犬上で飼われる犬も運　千梢
門限におくれて犬に怪しまれ　花梢
盲導犬けなげに信号みて渡り　小石
飼主の気性を犬は心得る　操子
バタ屋につれ添う犬は忠犬らしく見え　きさ子
雑種犬残飯だけで番させ　一栄
真夜中の犬の遠吠えスリラめき　同
犬好きを犬も知ってて吠えつかず　清子
猛犬を覗けば小犬尻ぱ振り　同
お刺身を犬にもやっておとり膳　阿茶
散歩さす犬とえんえんのチャンチャンコ　同
八っ当り犬は疑惑の頸かしげ　酔夢
お犬さま散歩そこのけ野良犬よ　同
特優の秋田あるじをひきつれる　同
軸
スピッツ五匹連れて鵜匠に似て歩く　葭乃

五月号発表「知性」3月25日着便まで

・一路集・

早出

山内静水選

子の寝顔うらやんで出る早出番　砂生
早出して出してもらったお茶の味　秀峰
反対意見あり会議に早出する　湖平
スタミナの自信早出を申し出る　初甫
早出する父さん駅の牛乳を飲み　旭峯
事務服に替えて早出のコンパクト　宗太郎
三文の徳が早出をしてわかり　幽谷
地下鉄がこんなに空いていた早出　芳朗
潮の間の仕事にかかる午前四時　愛鳩
路地裏の早出靴音気をつかい　秋月
早出して課長の抽出抜いてみる　十九平
片ちんのくつ下はいて出た早出　幽谷
早出して小使さんに邪魔がられ　晃男
たまさかの早出一日が長すぎる　初甫
早出と声をかけたがはじめなり　古方
真先にタイムカードを押す早出　愛鳩
早出する妻へ家中起される　芳子
早出して今日のプランへ寒い朝　季賛
祭日の早出は国旗立てて出る　秀峰
相すまぬ早出へ妻の身づくろい　魚山
早出して寒菊活ける寡婦若かし　千翁
ぱっとせぬ男で早出も残業もし　ゆかし
タクシーのライト早出の眼にまぶし　秀峯
看過せぬ事故へ力を貸す早出　魚山
アパートを泥棒みたいに出る早出　八九寸
弁当はあとから届けます早出　宗太郎
早出する街にシグナルまだねむり　笊柳
早出する玄関新聞がもう来てる　昭三
犬の散歩を妻にのんで来た早出　幽谷
早出した現場の恐いよな焚火　愛鳩
早出してみんな早よから起きている　古方
目覚の事で早出の朝がもめ　藤波
老いこんでゆくのが進んでする早出　谷水
早出してまだ戸が開かぬ勤め先　卯之助
セールスのノルマ早出をして構え　文平
折角の早出ストーブ燃え付かず　代仕男
どことなく酒の匂いも嗅ぐ早出　木魚
素晴しいホームの菊を見る早出　弘朗
倒産の噂の中を早出する　旭峯
工場の猫に早出を迎えられ　軸

借り着

高橋操子選

一日の事や借り着ですましとき　初子
借り着では嫁かぬ異母に意地があり　甦光
靴下も借りて新郎らしくなり　宗太郎
借り着屋に見合い成立保証され　可住
借り着して洗濯代が高うつき　庸佑
お子さんの手足がこわい借り着なり　木魚
来るたびに紋の違った着物で着　幽谷
紋服の借り着で上座父代理　八九寸
紋の事など言うては居られぬ日の借着　芳朗
借り着でも中味日本一の嫁　晃男
高砂をききあきている借り着　芳仙
皺にせぬように借り着の座りよう　代仕男
借り着から開放されたハネムーン　芳子
突然の悲報によんどころない借り着　祥月
借り着しているのに衣裳ほめられる　十九平
借り着した事も忘れて酔いつぶれ　鶴丸
借り着とは知らずセンスをほめてくれ　章雅
月賦まだ済まず借り着の様に着る　秋月
一時間いくら借り着で式をあげ　秀峰
借るだけで月給とんだ色直し　万竿

高三のおしやれこっそり借り着　たつみ
大役が済んで借り着は飲み直し　明朗
姉さんの借り着ですまぬ子に育ち　弘朗
借り着など嫌いと母の気をもませ　双楽
紋付の紋はどうでもよい借り着　卯之助
式服の借り着へプラン練りかた　文平
又借り着して極道が戻って来　笊柳
脱がすのに親が苦労をする借り着　昭三
社内結婚同じ借り着の後や先　隆子
参観日借り着が借り着賞めている　砂生
借り着して町内会の道普請　砂生

佳

もつれている女をさけている借り着　七面山
胸はって借り着三々九度もすみ　酔夢
借ったとは言わずにズボンずり上げる　千翁

人

返えす日どうか考えてから借り着　古方

地

小走りに落目をみせて行く借り着　谷水

天

ホステスに借り着のネームおぼえられ　恵二朗

軸

柄よりもしつけかかった方を借り

達筆

浜田久米雄選

達筆でとうとう出世せんじまい　可住
前衛派達筆すぎて線となり　松風
サイン帳だけは達者なスターなり　芳仙
代読の要る達筆をもて余し　代仕男
達筆の祝辞代読またつまり　宗太郎
達筆の割におくれている出世　秋月
字引では引けぬ達筆勘で読み　不水
水茎の跡うるわしく断られ　晃男
達筆の標札落目とは見せず　たつみ
達筆が課長のとこへまた呼ばれ　愛鳩
達筆へクイズのように顔を寄せ　十九平
これが達筆達筆かなと思い　古方
達筆かにぎれば筆がよく動き　庸佑
達筆の賀状うっとり屠蘇に酔い　初甫
達筆のつもりで書いている名士　藤波
達筆を賞めて戻って辞書を引き　幽谷
達筆で書いた色紙は所望され　双楽
達筆のわりには当て字よく使い　古心
達筆へ村のただ役押しつける　文平
達筆の軸は頭をひねるだけ　旭峯
ご先祖のだれに似たのか筆がたち　恵二朗
達筆を読んでもらえば貸せとあり　砂生
その顔に似合わず筆の方達者　七面山
定年期頭も筆も枯れて来る　笊柳
達筆の弔辞がうるむまま吐切れ　千翁

佳

達筆を振ってくれとおだてられ　藤波
達筆の真価は二三合のんで　愛鳩
枯れてますねと達筆とは言わず　どんたく
判読が出来ぬ達筆にも困り　芳朗
達筆の和の字が駅を丸くする　藤原秋月

人

達筆の平に課長は墨をすり　木魚

地

なかなかの達筆ところどころ読め　静水

天

達筆はほめ借金は断られ　春雄

軸

達筆へ筆買いに行く用が出来

作句教室

清水白柳

研究題「似合う」

課題吟に類想はつきものであることは言うまでもない。そこでどうしたら類想を避けることが出来るかと言うと、とても出来ることではないと言う外はない。それ程だれでも思いつく事は同じなので、結局、同想の句であっても、表現する文字の使い方や、てにおはの一字の違いが、句の性格を左右することになるのである。類想からのがれるために着想を拡げる苦心をされた句が今回は殊に多かったのはたのしいことであった。

寒椿抹茶の似合う旧友と坐す　与志
指輪より念珠の似合う年になり　句楽坊
公休のどてらが似合う年令になり　光道

寒椿というような季語を使った句は動き易いものだがこの句の場合はよく定着していると思う。それは抹茶の似合うという枯れた句語によってである。旧友と書いて、とも、と読むのは言うまでもない。指輪の句にも年輪を感じさせられた。念珠をつまぐる姿をじっと見つめている作者の眼にその年輪があるのであろう。公休の句は勤め人の家庭の安らぎをよくあらわされていると思う、そしてどてらに着替える余祐のある日当りのよい縁側を思わせてくれるのである。

根性にぴったり似合う作業服　保夫
菜ッ葉服似合う勤めで恙なし　露声
スラックス似合って運転免許証　明子

根性の句は作業服だからこそ生きてきているのであって、それこそぴったりである。菜葉服の句の下五文字の恙なしが一寸気になった、それは恙なしでその人の性格を表わして居るのだが何か物足りない弱さを感じさせられた。スラックスの句は、運転免許証というハッキリしたものを描いて成功した句である

何着ても似合う美人の不仕合せ　酔夢
若いのに喪服の似合う淋しい娘　勝子
すまないが喪服の似合う未亡人　痴亭

佳人薄命という言葉があるが、何着てもという句にはそれがある。併しどこかにこしらえものという感じがしないでもない。若いのにの句にはそれとなくただよう妖しさのようなものが感じられるのがよいと思った。すまないがという句には、うがち、がある。昔の落語の落に〝俺の女房も後家にしたい〟というのがあったが、男の思うことは余り変らないものらしい。

似合うのが不思議借着で来たわたし　芳子
父の通夜妻の借着がよく似合い　砂生
よく似合い借着結局譲り受け　隆史

借着の句が三句あった。どの句もよく似合うというのだが、初めの句はずば抜けて佳い。それは作者自身の偽らない感情が共感をよぶからである。こうした句こそ推賞していいと思う、作者の今後に期待したい。

似合うても似合わなくても既製服　雄声
入念の仕立似合わぬとも言えず　藤波

恐らく背広服を買うのであろうか、寸法さえ合えば柄などは少少似合わなくても辛抱するという小市民的なところがこの句のねらいなのだ、それでいいのである。入念の仕立の句には、注文主とのセンスの差が出ていて因り切った顔がちらついているのが面白いと思う。

母さんにそっくり晴着よく似合い　明子
母の古つつましい娘によく似合い　不水
娘にゆずり似合う柄だが懐しく　凡生

この頃は母の遺品も似合うて来　双楽

初めの句はお母さんがお嫁に来た時とそっくりだというのだが、次の句はそうではないそれはつつましい娘にという句語にあらわされているようにやや地味なのであろうか。

懐かしくという句はこのなつかしいという語が少しそぐわない感じがする。それは一寸惜しい気がするというのではないだろうか。最後の句のこの頃はというのはやや説明的な感じがする、こうした説明はいらないから、この五文字をもつと考えると句が深くなる筈だ。

サングラス買うてやりたい杖と笛　Y

人間のクズへサングラスが似合い　S

サングラス似合う男に灯が更ける　安彦

チンピラに似合わず理屈すじ通り　万竿

杖と笛の句はサングラスをかけている人間をヤユしたのだが、こうしたヤユは採らない人間のクズという句も度がすぎるようだ、サングラスをかける人種を限定したような感じで余りいいとは言えない。後の方の二句は可もなし不可もなしといったところ。

赤いウエア似合うて今年も浪人し　亜也

赤いシャツ似合う末ツ子にある自由　痴亭

赤い服似合う息子にも困り　静水

近頃は赤い靴下も男物にあるのでよく見かける。女の靴下に柄物があったり黒くなってゆくのも流行なのであろうか。両方の額を合せて二で割る政治が行われている世なのだから、すべてが中性化してゆくのかも知れない息子にも困りという句には世代の差というものを見せられるのである。

和服よく似合う律義な娘に育ち　文平

洋服も和服も似合う娘に育ち　あいき

見馴れてかパーマに和服悪くない　湖平

和服の句ばかりだがどの句もそれぞれに面白い。律義なというのはよい句語を見つけられたものと思う、そこにはつつましやかな姿が浮彫りにされている。洋服も和服もというのは親の慾目ばかりではない。その服を着こなす若さなのである。見馴れてかというのは面白い、和服なら日本髪の方がいいように思うのだがパーマでもおかしくないところに世の移り替りがあるのでそれを詠んでいる。

似合うよとほめてつぎはぎの服を子に　光道

お似合いと大人の嘘で着せられる　滋雀

つぎはぎは少しオーバーだが面白い。大人の嘘でというのは句語のうまさである。これは出色の作であると思う。

イミテーション似合う若さを嫉妬する　酔夢

赤い柄いまだに似合い羨まれ　美代

若さを嫉妬するという語もよく生まれたものである。これは矢張り日頃の修練の結果であろう。赤い柄がいまだに似合うのは美人だからである、その若々しさが羨望の的になっているのである。

青春の息吹きセーラーよく似合い　万竿

好きな人何でも似合う様に見え　鉄舟

青春の息吹きという句語もよかった。それこそセーラー服にぴったりである。何でも似合うという句は惚れた慾目という古い言葉があるのを思い出させてくれた。

マネキンが着れば何でもよく似合い　秋月

わたしには不似合いマネキンには素適　藤波

マネキンが着てると似合う柄だのに　安彦

自分の身体つきを言わずに均整のとれたマネキンと同じように思うところに人間の弱点があるのだ、そこをついたのがこの句である

似合うからおくれとショールせしめられ　勝子

似合うからも一度ネクタイ貸せという　砂生

よくあることなのだ。いやとは言えないところを見込まれているから仕方がない。

うれしさは憎らしい程の髪が出来　美代

似合うかと言えば手鏡ぬっと出す　静水

うれしさの句は美容院の立場での句であるそこには自分の腕を誇らしげに感じている一人の女性の心情を詠いあげて成功している。手鏡の句は女性ではない。手鏡を出されて、てれているのであろう。

身体つき派手な着物がよく似合い　よく似合いますと見立てのセンスほめ　松風章雅

取立てて言うことのない句なのだが、真実味があるということが見つけものか。

有り過ぎて似合う着物にまだ迷い　弘朗

似合わない服も気に入りや着てばかり　白扇

似合うとは思ってないが虫が好き　千梢

似合うのがなくて子供にまで当り　繁太郎

有り過ぎてという句は、無いものから見ると贅沢な話だ、がそこには慾に限りのない人間の姿を見ることが出来る。気に入った服の句の下五文字の、着てばかりを、そればかりとした方がいいのではないかと思った。虫が好きという句には素直な感情があって好感の持てる句になっている。子供にまで当りという句には誇張があるが、これ位いはいいのではないかと思った。

ダブルよく似合う社長の如才なし　笊柳

人扱いのうまい社長をよく描き出していると思った。

ライバルの着物がにくい程似合う　弘朗

にくい程という句語にこの句の焦点がある

お似合いをお世辞と知っていて嬉し　芳子

素直な句柄でそれがこの句の身上でもある

高い鼻弁十郎によく似合い　静観堂

着想のよさでこの句は生きている。

似合う似合わない女の楽しそうな会話　弘生

この句は表現で生きている句だと言える。

似合う気で買うて来たのに五等身　正朗

がっかりしても仕方がない。親を恨んでみても、もうおそい。

老いらくに赤いベレーがよう似合い　痴亭

釣竿に知事のベレーがよく似合い　旭峯

ろくな絵も画かずベレー帽よく似合い　露声

ベレーの句はまだ沢山あったがこの三句は具体的なものを描いているので採りあげた。

お値段もお似合いですと見くびられ　八郎

高い方を売りつけられたとか、売れ残りを買わせたという句も六句程あったが、この句の見くびられという穿ち味にはかなわなかったようである。

派手すぎる柄へ店員なま返事　徹也

これは正直な店員であるのが面白かった。

お似合いと思う夫婦に来た破綻　芳子

性分の似合わぬ夫婦で家が持ち　千夏

別居している夫婦という句もあったがこの二句にしぼった。

朝寝坊両方共という夫婦　双楽

年輪が似合う夫婦になって来た　雄声

ワレ鍋にトジ蓋ほんとによく似合い　旭峯

似合いの夫婦を詠んだ句が数多くあったがこの三句に代表されるようである。

似合わないのも押しつける姑の愛　千夏

女房のぬけたところがまた似合い　不水

法務局成程似合う印を捺し　与志

それぞれの句の持味が面白いと思う。

お似合いの夫婦と他人思うだけ　古方

古方さんの句には矢張り深いものがある。最後に一言、似てくるということを詠んだ句があったが似合うということと、似てるということは違うので採り上げなかった点を御了承願いたい。

五月号発表・締切三月二十日

研究題「**鼻　緒**」　五句以内

六月号発表・締切四月二十日

研究題「**叩　く**」　五句以内

宛先　大阪府南河内郡美原町丹上四〇四

清水白柳

清水一保氏（島取県）

町議選挙に起つ

二月二十日付けのおたよりによると、日夜強敵老雄を向うにまわして激しい戦いをつづけておられるそうである。

つかれ切った身心をはげましてくれるものは川柳であると、力強い文字が躍動していた。

やせ切って太るはファイトとド根性

―陣中より（一保）―

川柳塔社第一回常任理事会

―二月四日午後六時―

本社楼上で第一回常任理事会が開かれた。20氏に案内状を出して15氏が出席したことは、いかに諸氏が熱意をもっているかがうかがわれた。

まず生々庵主幹から、なにごとによらず、ことを実行する場合はかならず常任理事会できめたものにすることを提案された。ただし編集など緊急を要する場合は事後承諾をしてもらうこと。その一例として、二月号に発表した「川柳塔」中島生々庵選「近作柳樽」西尾栞選は、常任理事会の日まで待てば一カ月おくれることになるのである。

つづいて「路郎忌川柳大会」の骨組みだけ協議してこしらえ、会場や選者などは次回三月四日に決定することになった。（常任理事会は毎月四日ではあるが、日曜日にあたる場合は三日の土曜日に開催する）

清水白柳氏から、選者の一本化について、つぎのように担当月を報告された。

西尾栞氏は三月号と四月号。北川春巣氏は五月号と六月号。菊沢小松園氏は七月号と八月号。松江梅里氏は九月号と十月号。川村好郎氏は十一月号と十二月号。若本多久志氏は一月号と二月号。なお「川柳塔」は中島生々庵氏一本にきまった。これは内外の情勢から当然起こるべき問題であって、つぎいに以上のようにふみきったのである。

最後に金井文秋氏から会計報告があり、不二田一三夫氏から誌代切れの購読者をどうするかの発言があった。それと地方同人諸氏が読者倍加運動を自発的に展開されているうれしいニュースがもたらされた。（8時30分閉会）出席者 白柳・庸佑・水客・好郎・静馬・柳宏子・栞・すゝむ・形水・文秋・いさむ・生々庵・梅里・小松園・一三夫の諸氏。

大成閣に集る役員諸氏（舟遊氏撮す）

役員新春の集い

41年1月23日、午後五時から、心斎橋大成閣で理事長以下参事、常任理事、理事諸氏が集った（地方の役員諸氏には時間的理由から遠慮申しあげた）

議題は現況報告とこんごの方針その他であったが、清水白柳氏が立って、内外の声が「川柳塔」選者を生々庵主幹一本にということを報告されると満場拍手をもってこれに賛意を示めされた。

川柳塔発足以来、役員がこうして集るのはこれがはじめてであった。自粛の中にも少量の酒ビールがはこばれ諸氏の顔は明るくほがらかだった！九時散会。

出席者―没食子・形水・文秋・すゝむ・好郎・春巣・梅志・白柳・静馬・操子・古方・生々庵・栞・舟遊・柳志・水客・梅里・竹荘・多久志・薫風・恒明・一三夫・葉子

路郎忌川柳大会は41年七月十日（日）

午前十時開会
午後六時閉会

- 第一部 一周年祭典（午前十時）
- 第二部 川柳大会（正午）
- 第三部 懇親宴（午後三時）

（詳細は次号で発表）

第百七十八回（新年度第六回目）

大萬川柳

兼題「苦笑」入選発表

選者　清水白柳

投句総数　六百二十四句

入選　八十一句

パパの苦笑子等に再婚すすめられ　八尾　弥生

苦笑する顔を煙草でまぎらせる　福岡　湖平

言訳を苦笑しながら聞いてやり　玉島　承平

苦笑する妻へ銚子を振って見せ　大阪　双楽

久し振り会うて無心の苦笑い　岡山　一声

社長の苦笑まだまだ脈があり　豊中　古方

手まわしがよすぎましたなと苦笑　南河内　吸江

裁判長夫婦の機徴に苦笑い　奈良　凡茶

どなられて済んだ急停車の苦笑　堺　一舟

泣く子には勝てんと苦笑して譲り　大阪　一栄

先附けの小切手もろて苦笑する　松原　万竿

苦笑してファンのテープ顔でうけ　富田林　東雲楼

ほめられた月賦ずくめに妻苦笑　布施　清人

職長に欠伸見られた苦笑い　大阪　春巣

薬まで指定をされて医者苦笑　和歌山　木魚

無免許は苦笑しながらついて行き　笠岡　桃里

身の上を話し終って苦笑する　泉北　好郎

苦笑い言いたいだけを言わしとき　高槻　静馬

年寄りの日に席譲られて苦笑い　笠岡　如牛

出藍のほまれですよと苦笑い　島根　芳子

お迎いがまだ来ませんと苦笑い　大阪　琴女

苦笑して無邪気な嘘を聞いてやり　岡山　十九平

恋愛か見合いかへパパ苦笑する　芦屋　たつみ

酔漢へ赤いポストが苦笑する　岡山　藤波

苦笑いこんちきしようと言わり　大阪　弓彦

不注意の痛さに耐えている苦笑　大阪　保夫

改札で子は正直に一年生　大阪　滋雀

綴り方苦笑のパパへまだ続き　八幡浜　砂生

口止めのわけを子供はみな喋り　大阪　竹荘

電話口苦笑しながら食いさがり　呉　甦光

棺桶で苦笑をさせる通夜の秘話　神戸　どんたく

いたずらへ元気ですねと苦笑する　大阪　弓彦

見ぬ振りの苦笑で抜けるパトロール　岡山　七面山

苦笑して黙って二枚貸してくれ　大阪　弓彦

ばれたかと自分の嘘へ苦笑する　神戸　どんたく

苦笑いうまくだましたともいえず　神戸　どんたく

うぬぼれを突かれてくれた苦笑い　岡山　七面山

苦笑いして横綱は起こされる　神戸　どんたく

娘ですよ娘ですよと苦笑い　岡山　七面山

三月の句会

玉造川柳会

時　十日（木）午後六時

題　幕、画面、染める

所　玉造交差点南一〇〇米　大阪信用金庫階上

南大阪川柳会

時　二十日（日）午後六時

題　実用、広い、おしゃれ、血

所　アベノ区松崎町三ノ十　割烹　大萬

苦笑いのあとしばらくは座が白け　倉敷　素身郎

苦笑もらすエレベーターの中に消え　大阪　没食子

はじめから取り上げる気のない苦笑　加賀　光郎

また寄附か今度は寺に嫁が来る　大阪　あいき

母さんに似てと多産の娘が申す　大阪　文秋

紹介をした友と新妻うまが合い　大阪　秋ろくな癖似んなと親が苦笑い　大阪　阿茶

腰叩き若さに負けた苦笑い　大阪　梅里

満塁へ三振苦笑して戻り　富田林　美房

悔恨と苦笑淀から戻って来　西宮　多久志

同僚のデート苦笑ですれ違い　畑和田　きさ子

上役の威厳苦笑にして保ち　大阪　旅風

苦笑い貸してもらえぬ予感する　大阪　梅里

値切られて苦笑しながら釣を出し　大阪　水客

苦笑より外に仕様のない返事　大阪　没食子

解からない洒落を苦笑で紛らわせ　選者吟

わかる顔わからぬ顔の合う苦笑　篠山　可住

苦笑するばかり父親の参観日　大阪　痴亭

そやったら離婚しいなと子に云われ　堺　亜也

酔うたまねするおえぼの堂に入り　篠山　可住

ウナ電の息子へ苦笑して送り　大阪　明子

古傷に触れれば咳いて苦笑する　門真　鉄児

女なら泣くとこ苦笑ではぐらかし　布施　清人

苦笑いされて失言したと知り　倉敷　素身郎

女房の前で税吏にほめられる　地ノ句

信心を看板にして嘘をつき　大阪　水客

苦笑い妻は不審を持ちはじめ　東雲楼　光郎

苦笑した医者に節制すすめられ　竹荘

人ノ句

そんなことで辞表出すなと苦笑され　天ノ句

見直しましたと問題にされていず

苦笑して突飛な夢を反芻し

苦笑して出した紙幣に皺がなし

大萬川柳ベストテン

（二月現在）

一	水客	一八、〇	大阪	次きの兼題「図書館」　五句以内	
二	梅里	一四、〇	大阪	発表　三月二十日	
三	吸江	一三、〇	南河内	三月の兼題「耳」	
四	好郎	一二、〇	泉北	締切　**三月二十五日**	
五	美房	一一、五	富田林	発表　四月二十日	
六	可住	一〇、五	篠山	投句先　大阪市阿倍野区松崎町	
七	柳志	一〇、〇	大阪	三ノ一〇	
八	清人	一〇、〇	布施	大萬川柳会	
九	桃里	九、五	笠岡		
一〇	万竿	九、五	松原		
一一	痴亭	九、〇	大阪		
一二	木魚	八、五	和歌山		
一三	没食子	八、五	大阪		
一四	静馬	八、〇	高槻		
一五	圭井堂	八、〇	堺		
一六	宗太郎	七、五	石川		
一七	阿茶	七、五	大阪		
一八	小松園	七、〇	大阪		
一九	きさ子	七、〇	岸和田		
二〇	東雲楼	七、〇	富田林		
	光郎	七、〇	加賀		
	竹荘	七、〇	大阪		

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

（橘高薫風・担当）

☆川柳平安二月号、堀豊次氏の言「選者は作者の中へはいってゆくことを望んでいます。作者が選者の中へはいってこられることは間違っていることだと思っています。

現代の川柳は一人一人が一本の道を切りひらいてゆくべきだと考えています。選者という役割は、それをお手伝いするものであると考えていますが、間違っている道は早く作者に意思表示をしなければなりませんから、その意思表示が選者としての色彩といえば、いえます。しかしあくまでも作者が主であって選者は従の立場だと考えています。

☆麻生虔乃先生から一月十五日付のお便り、「昨日からめっきり冷えて参りました。電気蒲団を痛む局部にあてて寝ています。ほんとに元気になるのは青葉かおる頃でありましょう。」

☆吉田水車氏（名古屋市）から一三夫氏への書信に、「川柳塔」も益々発展、恩師の遺髪を継ぐにふさわしいものと信じております。」と。吉田水車氏は路郎門下不朽洞会員の最古参者の一人で、この程川柳作句を復活、本誌に投句を寄せられたもの。こういう作家のお力添えは誠に百人の力を得たように心強いものを感じさせられる。

☆福永清造氏（京都市）は今年六月還暦を迎えられるので、従来の雅号泰典を本名の清造に改められることになった。又、旧臘、胃潰瘍と診断されたが、手術はせずともすみ、六月の記念句会の企画に大いに張切っておられる。

☆奈良二月堂お水取り協賛川柳句会は3月13日（日）午前十時開会、会場は三条通りの商工観光館ホール。兼題、杉・道・塔・鐘・風・当日雑観、投句は三月五日まで、百円同封して奈良市北市中町六四森夢児宛、なお、ふあうすと旅と句の会が、第十二回行事としてお水取り行事拝観、協賛川柳句会参加を企画している

☆弓削川柳社（岡山県）では昭和四十一年の他社川柳大会参加を兼ねた吟行を企画、参加者の便宜のために旅行積立貯金をはじめた。

☆直原七面山氏（岡山県）は昭和四十年度紋土総合成績で第三位を獲得されたが別に盗塁王（一分間吟）の賞も得られた。

☆函館川柳社（函館市）は来る三月、創立五十周年の輝かしい日を迎える。創立記念日は自祝のみとして、記念の大会は時候の良い八月に北海道大会として、本州にも呼びかけて大々的に行う予定である由。

☆弘津柳慶氏（広島市）は1月25日から四日間、三次松江、出雲方面に出張され大雪に見舞われ急行バスが二時間半も遅延し帰宅されたのは夜の十一時過ぎだったとのこと。

故 高須啞三味追悼句会

▼日時　昭和四十一年五月三日正午より
▼場所　東京都新宿区若葉町二の九　西念寺
　電（三五一）〇六六二番
▼会費　金百五拾円（呈茶菓、遺句並に会報）
▼宿題　（各三句吐、字結び可）
［無］　東京　山路星文洞選
［蔵］　ふあうすと　増井不二也氏選
［館］　番傘　松本波郎氏選
［高］　川柳塔　橘高薫風氏選
［巣］　静岡　榎田竹林氏選
［痣］　名古屋　伊志田孝三郎氏選
［味］　大阪　脇田梅子氏選
［三］　北九州　出口夢詩朗氏選
「啞三味想出吟」一句（他に席題四題）
▼講演　村田周魚氏　富士野鞍馬氏
　川上三太郎氏
投句は金百円を添えて四月二十五日までに
東京都台東区下谷二の二〇の九　松井清志宛
主催　武蔵庵同人
（後援）　川柳きやり吟社　川柳かつしか
　川柳研究社　観光川柳研究会
　川柳江戸川吟社　東京番傘川柳会

☆海士天樹氏（尼崎市）は本誌や本社句会が日ごとに盛大になっていくことは、みなさんのご努力によるものであると、生々庵主幹にお便りがあった。

☆吉田圭井堂氏（堺市）はご病中のところ二月句会へお元気な姿を見せられた。

☆藤原秋月氏（岡山県）は生々庵主幹と一三夫氏に同人へ推選されたことをよろこび、米つぶへ主幹の句と号を書いたものなど六つぶも本社へ送ってこられた。

☆小西無鬼氏（兵庫県）はかつての川柳篠山時代を再現するため、ご多忙の中を同人増加へ全力をむけられている。

☆長野井蛙氏（防府市）既報のように胃かいようの手術をされたが非常に順調で完全退院の日も近いとのこと。—とりとめたいのちべッドで芽をはぐみ（井蛙）

☆川柳さっぱろ誌は来る七月号で誌齢百号を迎えるので、誌上で知事杯争奪句会を計画中とのこと。

☆甲斐田桜里句碑建立、春田節夫句集柿山紘輝句集出版記念祝賀川柳大会は昭和四十一年一月三十日（日）午前十時から熊本県福祉会館で開催。

☆昭和四十年度時の川柳社賞は林一徳氏が受賞した。

☆国弘半休氏（下関市）はニューワールド、ツーリスト防長観光ＫＫの常務として活躍をされている一方、実弟居住地の小野田市で食堂、割烹を兼ねた料理業を開店、同地で小野田川柳会を作られ川柳塔のためにお力添えたまわることになった。

☆和気川柳会（岡山県）の成人式祝賀川柳大会は昭和四十一年一月十五日開催、懇親宴で今後の会員の努力発展を期したと。

☆米沢暁明氏（大洲市）から「貴社その後のご発展をおよろこび申します。私こと中央誌はただ一つ「川柳雑誌」と共に三十年を歩み麻生路郎先生のお世話になっていたのでありました。去年六月ご病床を万代西に訪ねましたが面会謝絶で遂乃先生に会って帰ったまま先生とのお別れになり残念至極に存じます。川柳塔とのご縁今後ともよろしく。

☆西いわを氏（大阪府）から「近作柳樽欄が至って淋しくなりましたね。皆様も同感と思いますが出来るだけ投句頑張って貰い度いものです。毎月でもよいから奮斗を促して下さい。冬眠状態でいるとじれったく、抑界展望が楽しみの一つです。」

☆清水一保氏（鳥取県）は町議選に立候補され苦戦中とのお便りをいただいたが結果は上位に当選。おめでとう。柳人町議のご活躍を祈ります。

☆同人奴田原紅雨氏が高知新聞柳壇の選者になられた又、樫谷桂緑氏が毎日新聞高知版の柳壇選者に。両氏とも四十一年一月から。

☆堀江芳子さん（島根県）は、島根新聞新年文芸川柳（尼緑之助選）「朝」に一席入選、喜びを寄せられた。句は「下駄の音こだまで帰る初詣で」

☆川岡壺眼子氏（浦早市）指導の川柳講座はおいおい実績を挙げて、新年句の天位賞を二名も獲得、教育委員会や各新聞社の賞を得た由。

☆橘高薫風居で番傘「壁」句会が二月十三日午後一時から開催された。例会場がさしつかえたので急拠変更になったのだが川柳塔の明和研究会のメンバーも合流活発な発言に終始し有意義であった。

☆川柳塔社第一回常任理事会が二月四日午後六時から川柳塔本社楼上で開催された。

新同人紹介

三井酔夢
—阿茶、白柳推選

藤原秋月
—一三夫、生々庵推選

本社二月句会

会場・自安寺
41・2・7・午後六時

「せんば」の宣介主幹「番傘」の萬楽氏ほか、各社のおレキレキのご出席で二月句会もにぎやかだった。

さすがに二月の街は冷めたい。出足がわるいので句会部は浮かぬ顔をしていたが、開会まぎわにはいつものように会場はふくれあがっていた。

ストーブのそばにいる人たちは「あつい、あつい」と逃げだすほどの会場の暖かさである。最近は各社の大家がぞくぞくご出席くださるのでありがたいことである。

清水白柳氏の柳話は「川柳はひねって作るものか」という作句研究からお得意の句評になり、きさ子、形水、野迷路、一水、珠笑、静観堂、源川、岳太諸氏の佳句があげられ新人の方にはいい勉強になったようである。

席題には珍しく岡田某人氏が顔を見せられ萬楽、六竜子氏と選者は多彩。

今月から柳話をする人が、常任理事会の経過を簡単に報告するようになった。

集句が多いとボツも多くなるがこれはやむえないことである。（河井庸佑整理）

出席＝与呂志・三司・古方・多久志・双楽・鉄舟・あきら・鳥荘・白柳・弓彦・孚彦・水客・圭井堂・静馬・登二・梅里・滋雀・某人・一舟・すゝむ・恒明・〆女・八郎・春巳・たつみ・千楠・文秋・玲人・よしを・一栄・清子・凡九郎・水京・痴亭・瓢太・一三夫・柳太・吸江・言也・葛城・多蘭子・清人・柳宏子・白溪子・庸佑・喜風・好郎・トメ子・萬楽・生々庵・静波・六竜子・静歩・舟遊・竜子・中性尼・天樹・宣介・野迷路・形水・金三・いさむ・宏子・季賛・某・あいき・葉子・

席題「隅」　岡田某人選

お通夜を逃げ出す用意は隅にいる　一三夫
女共美徳のように隅を選り　文秋
こっそりとお顔で映画館の隅　萬楽
清貧と仲よく街の隅に生き　生々庵
隅っこにごじゃごじゃ積々バス旅行　清人
常連が屋台の隅に狭うかけ　白溪子
隠し芸始まり隅の人が消え　竜子
陽を見ずに雑草ひそと隅に咲く　中性尼
隅っこのテープを知らみなしゃ　柳太
出稼ぎの飯場の隅で書く便り　滋雀
お焼香親族席の隅で順　萬楽
隅っこで下戸はすばやく飯にする　すゝむ
甘栗が一つ袋の隅にあり　水客
正論を信じて隅から悪びれず　中性尼
鑑識課隅の指紋を見逃がさず　柳太
継郷五年いま大阪の隅の隅　宣介
悪口を言うて笑えば隅に居り　トメ子
隅の方から遅れてきたのがやをら　静波
陣取った隅でしびれがきれず済み　一栄
隅っこに咲いても白菊よく自立ち　あいき
折箱の隅に奈良漬かしこまり　舟遊
盛会の隅は布団も茶もくれず　梅里
隅にいていいたいことが言える地位　庸佑
隅っこの一人が話こわしかけ　凡九郎
薄ぐらい隅でパトロンねばってる　静馬
新聞の隅に政治の舞台裏　天樹
劇通は二階の隅で立見する　圭井堂
花道の隅で師匠の眼がひかり　柳太
質蔵の隅にセコンド打って待ち　滋雀
採点がからい審判席の隅　萬楽
ストーブがある隅に居る風邪ごゝ　静波
隅っこはすぐに去ぬ気の通夜の席　清人
焼香の隅で一号という喪服　多久志
片隅に銀杏があり霧晴れる　水客
寒剤も枯れ葉も隅のすみに寄り　舟遊
片隅で生きても歳はちゃんと取り　某人

席題「からっぽ」　永田六竜子選

からっぽの頭に女見栄がありからっぽの酒うまそゝと飲むドラマ　金三
回送車待ち疲れた目に追われからっぽの頭ふり〳〵二日酔　滋雀
からっぽの心になって法話聴くどこが好いのかからっぽの壺飾る　柳宏子
当てつけのように投げ出す空財布からっぽの方の財布で娘はねだり　形水
からっぽの財布は母がほっとかずからっぽな頭になって温泉に浸り　すゝむ
一斗びんからっぽにしてもめ初め　吸江
政治空白ベトナムの赤い雲からっぽの頭かすめる金の事　柳太
からっぽの頭かすめる金の事　一三夫
凡帳面うがい薬はすぐに空ら　言也
からっぽの財布へそくり別に持ち　萬楽
空の魚籠きょうの天気へケチを　痴亭
　　天樹
　　春巳
　　宣介

からっぽになれば寝ころぶ酒の場　葛城
からっぽにゆたを掛けて来た荷物　圭井堂
からっぽのビンも並べてバーの棚　多久志
からっぽの胃へ二級酒がスンナリし　与呂志
からっぽの頭を風が吹き抜ける　三司
からっぽの銚子はそこへ転がれる　あいき
からっぽだからこそ厳重に囲むき　生々庵
からっぽの財布に質札よごれとり　多久志
からっぽにしとけと胃病食べさせ　一栄
からっぽの心を悟りとも言われ　よしを
からっぽの頭に入試のムチがなり　文秋
からっぽの家にするなと花便り　水客
家からっぽになれば授かる道を説き　与呂志
からっぽにして羨まれ　玲人
どの皿もからっぽにして羨まれ　あいき
から箱も積んで店頭出来上り　梅里

席題「不　満」　金泉萬楽選

割り切れぬ不満残して妥結する　古方
聞こえぬ聞こうと不満しゃべらされ　庸佑
友情の不満を言うて人に会い　水客
ファイトへの種火となった不満　一栄
末っ子の不満おんなし数のあめ　春己
役得があるから不満こらえとき　たつみ
だまってるので縁談不満かと思い　あいき
赤ちゃんの不満大事にされすぎて　清子
言うだけでさてどうなで無い不満　すゝむ
きりが無い不満黙って甘受する　すゝむ
顔に出た不満目ざとくとがめられ　すゝむ
不満ばかり並べへそくりには触ち　いさむ
金の事言わぬ不満はきざになり　あきら
われ以下もあって不満を口に出せず　六竜子
見る人が見ていてくれて不満消え　恒明
大将が替り不満がかわらない　舟遊
社の不満妻は注ぎつつ聞いてくれ　一栄
鍵っ子の不満小犬と話しする　中性尼
代表で不満きいてるあほらしさ　たつみ
不満など勿体ないと施設の灯　六竜子
返事の不満受話器知ったことでな　好郎
ほんとうの客は不満を言うてくれ　静馬
明らかに不満の音でドアしまい　柳宏子
長いものに巻かれる事にした不満　文秋
不満聞く方も不満な顔になり　玲人
後輩の不満聞きやく買って出る　季賛
ご不満を聞くだけ聞いて寄付を取り　柳太
やぶへびになってしまった不満な　恒明
不満ぶちあけそれからの握手なり　宣介
不満もて余し盆栽に水をやる　天樹
不満みな殺し家風に染まる嫁　玲人
モヤモヤの不満は夫だけが知り　多久志
何不満なくときれいな嘘をつき　某人
結局は不満な顔で引き受ける　柳宏子
自分への不満ストーブの火もつがず　孚彦
明らかな不満造花に灯が暗い　天樹
二次会へ出発不満勢揃い　萬楽

兼題「三　角」　河相すゝむ選

礼装の胸に三角覗く白　八九寸
三角がカメラに入らぬピラミッド　秋月
三角のもつれか毎日派手なこと　千夏
両方で三角関係いじめられ　どんたく
苦労して習うた三角みな忘れ　半月
どうせ眼も三角ですよとむくれ　どんたく
三角に口をいがめた顔　三時
三角に切られてこんにゃく編の隅　一三夫
スポーツの思い出壁に三角旗　一三夫
三角野郎出ると嚊子も派手になり　文秋
三角のあげを供えて正一位　阿茶
徹夜する三角定規へコーヒ来る　阿春
三角の襟元そこにあるほくろ　己
三角に積み上げられた米の出来　水京
三角の帽子ガイドの声となり　吸江
硯箱墨三角にあぐらかき　春己
三角の袋ち屑生かしアップリケ　静馬
三角布看護婦さんのやらかい手　烏荘
話もう目を三角にこじれ切り　野迷路
三角と丸すらすらと回答紙　萬楽
三角を三つ重ねて紋になり　白柳
三角の札へ用事のある役所　金三
三角帽ぬげばピエロの禿げており　静馬
どっちにもとれて三角マークつけ　弓彦
三角の危機名門をよろめかせ　天樹
見合いして三角の顎気に入らず　鉄舟
浮世絵の雪三角な傘をさし　柳太
三角な屋根裏に住みへそ曲り　一舟
九回裏もうやけにふる三角旗　栞
Vシャツの衿から胸毛顔を出し　あいき
三角布だけで良かったスキー靴　竜子
三角の底辺をうろちょろ蛤五十　清人
三角の屋根日曜に鐘が鳴り　江
冬の酒三角の顔になっている　水客
ピタゴラスの定理をいうて斜にな　栞
三角にタクト奴隷の進軍歌　天樹
三角を重ねるごとき日々厭し　孚彦
三角の頂点女きれいすぎ　清人
三角な顔寄せ合うて組らず　宣介
三角の底辺に友情見つけ出し　吸江
三角の角三角に家が建ち　言也
笑ったら三角の顔まるく見え　阿旅
三角と取り組んでいる答案紙　風
三角を乗せて積み木は家になり　佑
三角にもめてる話子がからみ　玲人
あきら

三角丸三角丸という人生か　栞　与呂志
大阪弁三角野郎がのし歩き　萬楽
オブラートの三角喉にひっかかり　水客
三角州てんてんと灯して海に入る　葛城
三角のすみそれぞれの意地を持ち　水京
三角に座って言い分聞いてやる　たつみ
三角の土地それなりにつかいみち　三司
三角の土地にも春の草いきれ　天樹
頂点を踏まえ三角崩さない　金三
炭抗が残す廃虚のピラミッド

兼題「ゼロ」　小川恒明選

死亡ゼロその日の空は晴れ渡たり　花梢
死亡ゼロのぼり事故の血をあびる　昭三
投資欲他人に食われゼロに泣き　繁太郎
ゼロ地帯政治のそとに忘れられ　すゝむ
根性はゼロに等しい人と知る　水客
ゼロ地帯それでも地代上がっとり　静歩
ゼロ一つ平気で予算つけ加え　与呂志
ゼロ地帯に住んでも税金払わされ　柳宏子
ゼロの数違う資本で歯がたたず　一舟
メーターをゼロに直して客を待つ　白柳
値札のゼロたしかめたしかめるひめる　みよ
財産ゼロにして養子いんでまい　あいき
ゼロ地帯ここにもきようの幸がり　与呂志
ゼロ二つなけりゃ買えるがなと思い　白柳
エキサイトしてゼロ敗けしてまい　阿茶
コネはゼロあとは実力運まかせ　水京
海抜0メートルキユーポラに雨がる　水客
立志伝ゼロから成功したほこり　金三
不渡りはせぬだけ当座はいゼロ　好郎
住めば都ゼロ地帯なぞ言うとれず　季賛
昇給はゼロでも社長信じて居　一舟
視界ゼロ霧笛西から東から　玲人
ゼロ戦機誉れも朽ちる平和の日　双楽
ゼロの数ばかり眼に入るシヨーケース　千梢
死亡ゼロ手柄のように旅を立て　弓彦
デカデカと記事になる死亡ゼロ　阿茶
公徳心ゼロの紙屑写される　いさむ
家計簿のゼロには触れず妻は酌き　静馬
税務署に信用ゼロで儲けてる　阿茶
ゼロをたしかめ店員に声をかけ

兼題「童話」　正本水客選

シンデレラ住んで居るよな丘の家　花梢
童話読む子にイメージ持つ父と母　三時
村はずれ童話のような地蔵様　清子
童話のおじんマツ毛もマユ毛も長かった　古方
神様の童話子供にピンとこず　静波
浦島を説いて聞かせばシエーと逃げ　孚彦
童話より漫画に強い現代児　よしを
童話集に眼鏡をそえて読んでえな　一栄
テレビには勝てず童話の本を閉ず　静波
王子さま現代の恋見て下さい　孚彦
アトムっ子に童話のテンポ遅すぎる　静馬
せかせかと童話の結末しりたがり　生々庵
分教場善意の童話本が着く　中性尼
創作の童話を聞かす若いママ　一三夫
童話集読ませて子供に託す夢　清人
童話に飽きこん少女ほんとうの恋を知る　静波
主人公になった気で聞いている童話　水京
疑わぬ子の瞳へ童話の夢が住み　たつみ
童話集狐はいつもつらい役　圭井堂
善悪のけじめはっきり童話集　清子
イヌもウサギも自然に喋っていた童話　古方
アラジンのランプが欲しい決算期　滋雀
善人がいて悪人のいる童話　あきら
童話からのぞく地きゅうはいいこと　たつみ
男ありて童話のなかへ逃避する　水客

兼題「重い」　中島生々庵選

封筒の重さへどんな話だろう　秋月
よい知恵もなく失職の重い靴　花梢
どたん場に重い口から泥をはき　半月
責任の重さひしひし子の寝顔　一三夫
胃袋の重さ引きずる悔い一つ　天樹
別居してみたが心の重い日々　清人
鈍行の貨車重さうな雪を載せ　白渓子
庭石の重さへ社長の懐手　柳太
重い尻夫婦喧嘩の種になり　弓彦
お互いの重荷聞いてるしまい風呂　みよ
寝て居てもギブスの足は重いなり　三司
重圧を感じる席におちつけず　与呂志
重い荷へ車掌も降りた田舎バス　柳太
なにぶんと重い菓子折提げて行き　痴亭
病重しと三行欄で子をさがし　多久志
嫁の手に旧家の重い戸がきしむ　中性尼
うかうかと買うたみやげの重いこと　一栄
手ごたえにひきかえさかな小さいこと　某人
いのししをずしんと置けば炉が熾り　某人
よい石を見付けたがあきらめる　多蘭子
面接へ口の重さを信じられ　萬楽
割勘に頭の重い月曜日　梅里
早合点されて仲人気が重く　好郎
不況です鉄くずの山動かない　あきら
重い筈ないがと体力うたがわれ　双楽
重いリユック山登るように街をゆく　多蘭子
重い荷が淀川上る商工都　金三
義理という保証の判を重く押し　多久志
川の水重いと言わず沈めてる　八郎
重ちょう重ちょうと妻も押す屋台　恒明
かつぎやの重い荷物を茶にいこい　六竜子
かげ口の重さに泣いた日を思う　水客
ボーナスの重味もらうネオンの灯　六竜子
荷が重いかつぎ屋定期胸で見せ　吸江
重荷でしょうねと女ねはじめ　好郎
病人へ嘘つくる日胃袋が重い　生々庵

各地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

交通局句会（大阪市）児島与呂志報

ヘソが痒うなおとべんちやら受付けず　春巣
二女の方が先に初孫産みよつた　淡舟
せめてもの枢へ酒も入れておき　鉄児
恋捨てる女へ落日まともなり　舟遊
ボーナスが酒代になる借りがあり　季賛
鏡台の曇りを拭いて女の座　胡蝶
人は皆善人胸に赤い羽根　凡々
何処が不景気なのか年末の人出　一乃字
ジングルベル鳴れど財布の口かたし　孤舟
働けど不平も出ない飯の味　一歩
すかたんを教えて後を追つかける　鉄舟
真面目より外にとりえの無い男　酔升
女文字妻が嫉妬の年賀状　みのる
ひのえ午気にせぬ若さに親は負け　雅巣
公休の朝から孫の馬にされ　三十四
髪と指と染めた喪服がかしこまり　のぼる
指先に力を込めて王手飛車　清流
いうなればもつての外の酒を飲み　松亭
腹割つて聞いた歳暮の松竹梅　正則
オトイレの花挿し替える妻ありて　与呂志

南大阪川柳会　金井文秋報

卓上へメモ演壇をまごつかせ　柳志
卓上のベルが不機嫌あふりたて　柳宏子
机の上に手紙一通人がいず　水客
一と月めきつちり月賦屋とりに来る　弓彦
暗がりへ来て付け馬がおびえだし　静馬
馬の脚今日は忠弥に吠えかかり　梅里
筍の新芽奇麗な線で巻き　金三
社で社長家では孫の馬となり　一舟
下見とは違う顔して生徒連れ　滋雀
卓上の名前の順が気に入らず　好郎
名人も馬の脚では名が出せず　文秋
注文を聞く卓上を軽く拭く　白柳
芽を出せぬ程に元木も疲れ果て　千梢
麦の芽よ強く育てと踏んでゆく　あいき
テーブルセンター歪んで熱もおびてくる　古方
一と月に一度のことが休み勝ち　小松園
喜ばせといて下見のそれつきり　恒明
卓上の茶は冷え口論今たぎる　凡九郎
卓上の一輪さしが淋しすぎ　双楽
飲む口に卓上せわし支那料理　章雅
卓上のお茶冷えたままの初対面　水京
机上の空論の方が花が咲き　八郎
植木屋の新芽は明日にも出ると言い　静歩
名目は下見ここは幹事の酔いどこら　一栄
出る幕じやないと顔まけして戻り　喜仙
柳の芽もうこんなにと身を寄せる　千久良
一と月もすればと云い云い病み続け　柳宏子
愛チチヤツタのようにおしめ挟んで居　滋雀
雑草の芽がホチホチと春告げる　痴亭

玉造川柳会（大阪市）西出一栄報

湯わかしの中の汚れに気がつかず　義介
出勤をたのしむパパの湯わかし器　照一
湯わかしの酒で飯場の年があけ　柳志
法善寺横町笹の波になり　句念坊
桜鯛鮮度にプラス笹の青　清子
ご機嫌の笹に仲よう福の神　水京
商売を繁昌させる笹もあり　天真
ジンフイズ女哀しき過去に触れ　六竜子
洋酒ちびちび楽しい一人旅　季賛
ニセ洋酒いい気になつて飲まされる　静歩
炬燵から届く所にある洋酒　金三
クーラーの風を送つて歳の市　宏芳
湖を撫でる風に比叡の山も晴れ　三時
見習いのやつとお辞儀も板に付き　柳宏子
挨拶が不得手お辞儀ですましとき　あいき
お年玉貰つたお辞儀素直なり　草々
先代写真になつてもお辞儀され　秀坊
角隠しお辞儀する度気にかかり　半月
風ありて花の尊さ知らされる　一栄
風の吹く晩だけ妻の顔で待ち　一舟
風紋を砂丘に画いて風は去り　貞山
春風が木の芽を出せと誘い出す　風仙洞

袖口から背中へ抜ける向い風　野菜
暖房を出た温もりを風がとり　文秋
ふところに焼芋風も心地よし　恒明
派出所へお辞儀している酔っぱら　章雅
子のことに夫婦でお辞儀しに出る　水客
お辞儀して思い出せない眼で別れ　白柳
厭な友お辞儀へ握手そり返えり　善一郎
雨宿りに来たデパートでお辞儀する　清人
叮寧なお辞儀で着物見くらべる　静馬

ウイロー社（ハワイ）築山快夢起報

飲仲間いざという時寄りつかず　斉蛇楼
婚約が出来て仲間がひとり減り　内海
通夜の席ゴルフ仲間の大談義　快夢起
仲間だと信じ洩らした秘中の秘　カロ女
それ穫物仲間が続く蟻の群　泉水
つき合えと元来た道へ飲仲間　三石
自惚は人後に落ちぬザル仲間　柳葉
仲間から一人離れて居たい夜　暁舟
もう飲めぬくせに仲間についてゆく　浅太
仲間だと信じておればしてやられ　魔花麗
思い出を温め合つてる老仲間　ブァケル女
飲めぬ飲めぬ仲間でウマが合い　拝山
趣味仲間飲んで歌えと忙しい　雪女
仲間から外れて忙し下戸の箸　紅渓
誘われてこれも社交と仲間入り　紅葉
月給日仲間にすまぬ用が出来　万里歩

備前川柳会（岡山県）

現金な男このごろ寄りつかず　久米雄
晴着買う米代しかと腹に巻き　あぎら
現金があつて月賦で買いたがり　清春
現金を見せつけている叩き売り　芳月
現金の強み値切れるだけ値切り　浄美
現金で買つたことまで自慢にし　正洲
負けさして現金出して又値切り　静女
札束の非情人間味を忘れ　文平
現金化する瞬間を検挙され　飴ン坊
現金がアミダに見える十二月　卓美
現金を見せれば言葉まで変り　水仙
現金にかえればすぐに羽根が生え　一声
居酒屋へ掛売り拒む歌を貼り　胡風
現金を持つてる友について飲み　静子
吸い現金であるたすけ合い　笹舟
駄賃をやれば現金な子の使い　伊久野
十円の駄賃が小憎つ児走らせる　幸仙
現金を打てば子供もよく動き　君子
銀行で見た現金は紙に見え　秋月
孤独感こたつへのせた手が薄い　知水

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

くじ引いて互に笑うたけの貧　斐山
景品のタンス未だある福引場　句念坊
アベックで来て特賞を引いて去に　柳翠
見送りの方が不覚の涙出し　伊津志

第四回四国川柳大会

時　昭和四十一年四月二十四日（日曜）
所　松山市歩行町　PTA会館
兼題「引く」　山本芳伸選（香川）
「足音」　中西三智子選（香川）
「城と女」　田中潮風選（徳島）
「裏切」　福田白影選（香川）
「鰹」　宮本時彦選（高知）
「箸」　西森白雨選（高知）
「我が家」　仲川たけし選（愛媛）
「狸」　長野文庫選（愛媛）
（席題　二題の予定）

歓迎のリズムに乗つた土佐を発ち　古城
ハネムーン見送り派手なご出発　勝子
代議士と言う肩書きの妻が発ち　文子
腹巻きにお札丸めて発つ準備　寛
明日は発つ故郷の丘夕景色　夢生
栄転へ子は転校をせつながり　蛸蛇
栄転へ別れを惜しむ発車ベル　呑洋
栄転に菊一鉢を積み残し　昌雄
栄転の友との距離をふりかえり　一歩
愛ゆえの別離ふり向いてはならぬ　紅雨
年頭の決意とてなし凡夫の詩　桂緑
散髪をせよと職場の娘に言われ　大破
自問自答飲んでゆこうか帰ろうか　松風

関学川柳会（西宮市）　中内享彦報

戦争をする人見る人アジる人　悪郎
赤いハネ貧しい人の手に入らず　子恵
子の目にもらわれしいママの赤セーター　隆
正月のとそにもにおうおとなの香　久柳子
赤い羽根つけて歩く大通り　柳恵
姫百合の塔で泣く人は幸せだ　鴎石
家計簿のやたら目につく赤い数字　一旦
福引きは虚しい音で玉を出し　皆無
戦争で散らなかった恋父母元気　孚彦
戦争があれば儲かる職を持ち　白柳
ジングルベル角を折れても鳴っていた　古方
戦争を伍長の顔が象徴する　薫風
原爆の手で人道主義ふりかざす　すゝむ
反戦のビラを指導者ふみにじむ　舟遊

川柳たけはら新春句会　山内静水報

お年玉母のさいふへみなあずけ　洋子
火事はこわいとテレビが見せてくれ　日出夫
昼ご飯ぬき餅腹をもてあまし　宏子
年賀状全部を馬の絵ですませ　勝彦
年賀状出さない人から来て慌て　浄美
今年こそと思うた今年終ってた　利恵
初春の煙いテレビに負ている　悦子
大声で叫んで見たい秋の空　延子
下駄はいて外まで歩く現代娘　恵津子

雅号ぶつちやけばなし（10）

ちしょう

•天正　千梢•

てんしょう

四年前、川雑の川柳まつりが四天王寺本坊で開催されることを新聞で知り、はじめて川柳になじませていただいた第一歩でした。二カ月は全没でしたが三月目に本社句会で天賞をいただいときは驚きました。その後はたまに抜けても大先輩の高橋操子さんや内藤きさ子さんの雅号とよく間違われご迷惑をかけておりましたところ、不二田一三夫先生から〝みさ子〟をやめて千梢にしたらどうかとお手紙をいただきました。千の梢とは木の繁りを見るようであるし、また天賞（天正）地賞（千梢）にも通じるではないか、とのことでした。名前負けがこわいのですが、改号を機会に一層の精進をしたいと思っております。

主婦・四十五歳

夢だいて拝む初日が美くしい　恵次
開口一番みんなに笑われる　利幸
就職へもう母ちゃんは嫁のこと　清
妹の意見も聞いて服を買い　俊司
元旦のこの心にて世にいたし　ひさし
句をのせた賀状も嬉しいお元日　和子
清新の心カレンダーの絵を見つめ　正
声出して心うつ詩くり返す　春男
しじみ売る声遠くから朝を告げ　松緑
よろこびの声はテープにとつてある　そのみ
初膳の平和へ妻と箸を割る　菁居
その辺で我が子も遊ぶらしい声　俊健
気休めの言葉素直に頂戴し　凡女
縁起だと云われ盃ことわれず　操子
誕生日元旦ばかりに凝われ　扇水
正月の時話の針が進みすぎ　一路
新年をばらは雪のままで越し　文平
天馬空四十二才は飛躍せん　澄恵
応答の声に救援隊は湧き　季武
長生はするもの声の手紙受け　房枝
限られたニュースへ不安ふとかぁ　酔法
老妻をかばい小雪の初詣　政已
免許証とり杵もつ手にも入る力　春竜
叱られて音のせぬよう風呂を焚く　緑水
二月の陽みどりの声がおし寄せる　俊健
口ずさむ娘の声に朝を覚め　利尾
ほろろゆる噴水風の呟やきか　松風
まつすぐに行けば定年だけが待ち　不朽
静火

気を悪くさすだけだから話すまい　房子
拍手を打てば地の声神の声　静水

あすなろ川柳会（大阪市）

生活のリズムが狂う松の内　弓彦
松取れりや髪の手入れもそれつきり　恵美子
松の内素直にお替りつけてくれ　百酒
他人の家建てて我家は建てられず　慶之助
今日からは他人じやないよ肩にふれ　尤三
早出して社長無言で範をたれ　双楽
送られる方もほつとする発車ベル　福郎
落目とは知らなんだから出た言葉　ゆきを
茶柱が立つた立つたと科学の子　幸児
茶柱を見ながら叱言聞いており　好郎
丹前を着せて貰うて孫の守り　よしを
丹前を寓居の雪が羽織らせる　素郎
丹前になつて社長と間違われ　梅里

むらくも川柳会（島根県）藤井明朗報

湯の街の丹前誘う国なまり　明朗
靴音が口笛にのる給料日　清泉
丹前の似合わぬ妻と旅の宿　昌
小男が宿の丹前もてあまし　多津朗
郵便が吹雪をついて届く朝　勇
無火災をほこるポンプの〆飾り　一郎
猛吹雪苦にせぬ家路新家庭　孝華
ビルの火事水の届かぬとこで焼け　正朗
模擬訓練火事あつさり鎮火され　加代
音音音かさなり合つてビル工事　澄水
不法建築逃げ場なかつた火事の跡　芳子
吹雪の夜汽笛の音を遠く聞く　美枝
先生の足音みんな席につき　俊夫
金属音だけを残して機は見えず　白汀
吹雪にて樹々の枝から雪が散り　敏明

どんぐり川柳会（羽曳野市）川村好郎報

名も知らぬ花もいとしき試歩の道　史好
高嶺の花とあきらめ切れぬ恋の意地　岳太
バスの旅労資をへだてぬコップ酒　利白
みちのくの旅情をそそるそばの味　一平
母の心一杯つまつた旅カバン　芙容
丹前に着替えて一服旅の味　鬼遊
拝啓と旅の子の便り気取つてい　道夫
姑に旅の疲れも見せぬ妻　白扇
土産物義理の数だけ買い揃え　馬翔
二つ三つ小言残して父は旅　まこと
構内の花の香ラッシュの中を這い　努
花占い好きと出るまでくり返し　ぶん子
ハネムーン貰つた花束じやまにも　雪貞
三畳の間借りに一輪有る風雅　悟空
ゆとりある暮し菊花展に立ち　功雄
栄転の旅は拍手で動き出し　マサエ
病床のみたされぬ旅心地図に線引く　金太
旅先に病んで女房のありがたさ　水泡
旅というかくれ家記者に見つけられ　生長
アベックの気になる夜汽車一人旅　美勇
長生きをする気になつた旅の宵　孤舟
一等車乗つてる女のすまし顔　直己
旅の宿聞いてた程の料理出ず　石秋
かけおちも人には旅と見せかけて　早霧
安サラリー旅行カバンを重く持ち　ひかる
旅かばん新妻らしい思いやり　万里
雪月花肴にしては飲みたがり　出目夫
勧誘員先ず玄関の菊をほめ　一歩
文化祭平和寿ぎ菊薫る　喜風

どんぐり川柳会（大阪市）川村好郎報

灰皿が憎い彼氏の手がふれて　一人
怠気はらむ煙草を灰皿しかと受け　雪男
おかがみのカビを洗つて松が明け　圭太
外米も交つて餅の世智辛く　斯道
葬式と知らずまん幕子がはしやぎ　史好
吸がらの山にふと倦怠の影がさし　川太郎
灰皿にねじるタバコに意地があり　ひとみ
禁煙をしても灰皿もとの位置　明人
穴あけたたみに灰皿のせて去に　吸江
灰皿にほこをつくねて句にならず　琴路
灰皿のない女世帯へ男客　章子
灰皿もあるが湯呑みに入れる癖　喜風
灰皿に独り寝のわびしさもまじり　岳太
灰皿の数で友に自慢する　くり坊
灰皿を出されて禁煙とは云えず　幸子
丼の蓋灰皿にしてやもめ　痴亭
話無中みかんの皮に灰を捨て　若菜

灰皿に煙ひとすじ君無言　のん子
荒れた手で丸める母の餅白し　努
苦労した思い出話に餅が焼け　草春
悔のない間借で春待つ鏡餅　弥生
峠道まだ名物の餅を売り　万竿
草餅の色が目にしむ母の味　東天紅
棟梁が鉛筆で書く思いつき　白柳
鏡餅綿と鼠は知っており　好郎
灰皿がくすぶり詩人冥想す　梅里

まるべに川柳会（大阪市）川村好郎報

十二月そう里帰りさせられず　泉睦
十二月切手忘れた葉書も来　美幸
近所まで来たと借金とりに来る　立見
四軒目は近所ではなし旅土産　睦子
満員の飲み屋忘年会もない私　裕児
よいことがあつて忘年会欠の印　一世
近所の目集めて二号派手に生き　瓢太
近所にも聞えるようにキイ叩き　圭子
親知らず子供同志が知る近所　星斗
決算赤字忘年会のみ派手に　扇里
日記帳白紙がつづいて十二月　茂児
思いつきデパートへ来てまた変り　好郎

富柳会（富田林市）阿部柳太報

だんらんを邪魔するように電話なる　青米
だんらんを元日だけに見る暮し　吉太郎
だんらんをさらうサイレン鳴りひびく　花梢
どたんばでああ緩談がまたこわれ　重子
どたんばで頼りになると知った人　美房
ともかくも約手で押しとく大晦日　好郎
体操を日課の様に太い足　八郎
倒産の社長に邪魔な太い腹　美房

晴窓川柳会（愛媛療養所）関本柳剛報

病身の明日へ明日へと運ぶ夢　好珍
火事火事と慌てて石臼抱え出し　武子
金欲しさ保険目当ての火事騒ぎ　松波
美人画のカレンダー揺れる男風呂　春枝
除夜の鐘カレンダーの役解き放し　本多
ジヤンと鳴りやめ組の三次よい男　がん坊
焼け出され後は師走の隙間風　波止
夢に見た母は昔の顔でありビー玉も僕の宝と火事の跡　千里
退院へ再出発の夢があり　須磨子
ダムの奥暮しの炭を焼く煙　憲坊
黄昏に脱殻終えて煙る畑　喜美恵
落葉しく小雨に煙る試歩の道　篠原
気まぐれに寄つた家にてもてなす　八重子
嫉妬する女房に気まぐれも云えず　島川
気まぐれな虫が鼓膜をいら立たせ　飛年
ローカルの煙懐かし旅の窓　柳剛
大噴煙地球も憂さを晴らすのか　マー坊
気まぐれにヘボを相手につげの駒　宮下
腹立ちも水に流せる妻となる　岩崎
幹子

城北明老句会（大阪市）田中風柳報

壁一重隣りの匂いかぎわける　芳子
あばら家に菊の香りの心地よさ　繁子
好きでする仲人商売だと言われ　源川
霜降りの頭忘れて派手好み　政夫
切れタコの枯木に止まりおよぐう　久江
男好きする顔でんねと苦にしてず　弘生
不器用に退屈凌ぎ柿をむき　濁水
共稼ぎしてでも好きと付いて出る　清江
是れがまあ我等が出した代議士か　一登
湯の町は好きだが金とひまがない　充弘
庭先を隣りの二階いやな窓　富士
好きだから思う言葉が口に出ず　一休
パチ持てば老いも気品が見受けらる　多幸
くる年も変りないのが倖せか　久子

宴会・折詰・出張パーティ

大萬

阿倍野区松崎町
TEL (621) 3935・7782
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

本社三月句会

日時　三月八日（火）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
　　市電千日前下車スグ北側
　　（電話211・1478番）
兼題　柳話　戸田古方
「テコ入れ」　辻白渓子選
「凡人」　金井文秋選
「間食」　水谷竹荘選
「近い」　菊沢小松園選
席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　百五十円
★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪（271）3985番

4月の兼題　「耳打ち」「非力」「人出」「見る」

・九輪水煙・

どこへ行っても雑誌の評判がよいのでうれしい。編集部と句会部を兼務する人たちの地味な仕事や、川村好郎氏のように毎月封筒書きや発送を手伝ってくださる人がいるので、すべてが快調に進んでいる。一三夫さんを助けて懸命の小谷葉子さんのファイトも見逃がせない。

とにかく口より体を動かさないと能率があがらないのだが、私も雑用に追われ毎月の原稿に目を通すのがセイいっぱいというところでまことにすまないと思っている。（清水白柳）

・2DK・

▼創刊号からアッというまに六カ月たってしまった。ふりかえってみて冷や汗ものだが、けっして怠けていたわけではない。休日も返上してガンばっているのだが、なかなか思うようにいかないものである。

▼表紙の色を考えるだけでも、デパートをまわったり書店へ行ったりして二、三日つぶしてしまうこともある。またあるときは心斎橋筋をあるきながら若い女性の服装の色から表紙の色をきめたこともあった。路郎先生や水府先生も、いろんな印刷物から色見本を保存されていた。チラシあり、キャラメルの箱あり、といったぐあいだ。

▼ネズミ（淡墨）を黒だけで淡くすると味も何もないが、群青と紅と黄との三色を合わせて淡くした、いわゆる三色ネズミなら表紙に使ってもいいのだが、このごろの若い職人さんがそれをやってくれるかどうか、やっぱり心配で、オイソレと手が出せないわけだ。

▼三月は〝ひな祭り〟や、〝皇后誕生日〟があるので女流作家ばかりの同人特集をした。いずれも本誌には初出場の方ばかりである。

▼相変らず次号以後にまわった原稿が相当にあって、ご執筆ねがった諸氏にはまことに申しわけないことである。

▽責任校了にしたのが直っていない。これが一番こわい。これは誤植ではなく前号にぼくの不注意から、水府先生の〝頬かむりの中に日本一の顔〟を〝中の〟と書いてしまった。訂正しておわび申しあげる。春だ、バットの快音がもうすぐ聞ける。（不二田一三夫）

五月号発表（3月15日〆切）

川柳塔（10句）[illegible]

近作柳樽（10句）[illegible]

課題吟（各題10句以内）[illegible]

六月号発表（4月15日〆切）

川柳塔（10句）[illegible]

近作柳樽（10句）[illegible]

課題吟（各題10句以内）[illegible]

何を選んでいたゞくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条

高島屋

★[illegible]
★[illegible]
★[illegible]

定価　百二十円（[illegible]）
半年分　七百五十円（[illegible]）
一年分　千四百四十円（[illegible]）

昭和四十[illegible]年[illegible]月[illegible]日印刷
昭和四十[illegible]年[illegible]月一日発行

川柳塔社

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十一年二月二十五日　印刷
昭和四十一年三月一日発行（毎月一日発行）
川柳塔　三月号
定価　百二十円（送料六円）

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰（化粧ケース入）一・八リットル詰・一二〇〇円
清酒　日本盛
灘　西宮酒造　醸
ニホンサカリ

料理も電話も　551　ここがいちばん
TEL（641）551-2

広東料理
豚饅　蓬莱　焼売
大阪なんば
◆出張販売店◆
なんば高島屋店・心斎橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー